
絶対 ♪ 親友(?)主義

とーた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対、親友（？）主義

【Nコード】

N1427F

【作者名】

とーた

【あらすじ】

主人公、松葉翔。その親友の白瀬凜は性同一性障害の女の子である。そんな二人が織り成すドタバタコメディ

第0主義「禁句と野口」（前書き）

初作品で、話の流れ等は詳しく決めてはいません。
お見苦しいかと思いますがお暇な方は是非お願いします。

第0主義「禁句と野口」

朝、俺は鏡の前で髪を整え――

「うん、オツケー！俺って完璧！」

と呟るのであった。

昨日買った整髪料を試していた俺は上機嫌であった。

そう、上機嫌であった……時計を確認するまでは！

【うむ、7時50分か、7時50分……！？】

なんかヤバい気が……遅刻か？

いや、違う！もっと生存本能的にヤバい気がしているのだが。

「……………あつ……」

気づいた俺は、カバンを引っ掴み走り出したのであった。

そう、命をつなぐ為に！

朝、俺は親友である凜と、マンション前で待ち合わせをしていたのだった。

しかも、俺が到着した時間は学校に行くには遅すぎる時間！だが、一生懸命走ってきたのであるし、大丈夫であろう。

「おはよう、我が親友、いやゝ今日も清しい朝だ……ぐえつつ」
殴られた！ダメだったようだ。

「死ね馬鹿が、僕を待たせる何ていい度胸じゃないか！」

痛い！痛い！痛い！

思いつきり腹殴らないでよ！

というか、女の子が殴ったりしないでしょ！？

「普通、女の子は……ぎょえつつ」

やはり、コレは禁句なんだよなー

「…最後の慈悲として遺言が合ったら聞いてあげるよ？」

皆さん、ここに般若がいますよ！

うむ、なんかこれはヤバイヤバスギル。

うむ、今ならこいつ気迫だけで殺れるよ、ヤクザさんも素足で逃げ出すよ！

「すみません凜様！お願いしますからこの愚か者をお許し下さい！」

秘技【土下座乱舞】発動！

許して貰う為に使うウルトラ級の必殺技である。

ブライドポイント

PPの消費が激しすぎる大技に値する。

本当に秘密にして置きたい技、略して秘技である。

「……シースルーのプリンアラモードDX」

我が親友は、ぶすつとした顔でぼそつと呟いた。
命だけは助かりそうだ、しかし！

「シースルーのプリンアラモードを奢れば宜しいんですね？凜様」

これは、重要な確認点である。

上手く通らなければ痛い目にあう事になるからだ。

「デラックス！」

・・・しっかりと気づかれていたようだ。

シースルーのプリンアラモードDXと言えば、ただでさえ高級なプリンアラモードを

超絶的に豪華に改悪したメニューである。お値段なんと1980円♪
モ。バーガーの匠のように一度は食べてみたいが高くて買えるかボ
ゲーな品物だ。

「デラックスは勘弁してくださいませ！」

「キイールウおデラアックスウ？」

死ぬかデラックスを奢るか、既に俺に交渉権は無かったようだ。
俺様三等兵は生還することに成功したが、相棒である野口少佐2名
は殉職なされたアーメン。

つてアーメンじゃなくて！、今月どうやって生きていけばいいんだ
！？

第1主義「般若再臨」

『かんぱーい』

俺と親友が同時にグラスをぶつけ合う。

いや、優雅な光景を浮かべた方には悪いが、俺の手には缶のサイダー。親友の手には部活で使う水筒。
正直言つて、優雅さの欠片も無い。

「いやー、今日の任務も楽勝^{マラソン}で合ったな親友よ」

ぼんぽんと肩を叩きながら、爽やかに笑う俺。

「それより、翔が遅れなければ走る必要もないと思うんだけど?」

肩に置かれた手をスナップを使って払いのける親友。

俺達は緊急任務（俺の遅刻）を請けて、走って学校に向かう羽目になった。

ただし、俺達は昔からサッカーを続けていた事もあり、スピードや持久力の面は自信がある。

正確には親友はまだサッカーを続けているのだが。

そんな俺達にとって、この程度は楽々ミッションコンプリートであり、

鐘のなる音と生徒の走ってくる音をBGMに勝利の余韻に浸っているのである。

「よっ、凜、翔」

俺達に話しかけてきたのは、

遅刻ギリギリダッシュをクリアしてきた我等の友達事【進藤心太^{しんどう しんた}】である。

ついでに俺は【松葉翔^{まつば しょう}】。

俺の親友は【白瀬凜^{しらせ りん}】。

「やあ、友よ、朝はもう少し余裕を持ちたまえよ」

アッハツハと笑う俺とジト目で睨んでくる凜とのコントラストは見事である。

そんな奇妙な空気に気づき、爆弾（凜）に話しかけてしまった心太は哀れながら愚痴の嵐に見舞われる事になった。

「おいおい翔、待ち合わせでレディを待たせるのはマナー違反だぜ」

嵐から無事逃れきった友はキザったらしいセリフを吐きやがった。ぷつんと何かがキれる音がした、勿論キれたのは温和な俺では無い。凜のいる場所で意識しなかったとしても禁句を吐いてしまった事は大いに同情に値する。

そう、キれたのは親友である般若様だ。

「あつ・・・」

今頃気づいた馬鹿（心太）は、慌てて口を抑えたが手遅れである。その後、俺は新たに始まった、うぎゃーとかひええーなどの賑やかなBGMを聞きながら、

うむ、野口少佐2名の殉職で済んだ俺は幸せ者であろう等を考えながら残ったサイダーを、ぐびぐび飲んでいた。

因みに心太は、昼休みまで保健室のベットでぐっすりを寝むる事になった。

多分、彼は寝不足であつたのだろう。

第2主義「購買という名の戦場」

保健室から復帰してきた心太と、凜と、俺は、今戦場にいる。荒ぶる戦士達が物資を求めて奪い合う。その名をK O U B A Iと我等は呼ぶ。

「じゃー、僕達も逝こうか」

凜大佐の出陣命令で我等は戦地に乗り込んだ。

…行こうかのイントネーションが少しおかしかったのは気のせいであらう。

俺は、生徒を押しつけ踏み倒し、偶に頭を下げつつも栄光の地を目指し前進した。

この戦場で勝ち抜くために重要な事は情けを捨てる事である。

「よしっ」

俺の指先に二つのパンが引っ掛かった、それを抱え込み後は流れに流され戦地を後にする。

少し離れた場所で俺が獲得した物資の確認を行う。

「マーガリンロールが二つ…」

マーガリンロールとは、購買のオバサンが物価高と戦う為に生み出したバターロールの劣化版である。

素直にマーガリンと命名する所は立派だが、妙に食欲の失せる結果となった。

つまりは、俺が獲得した物資は外れである。

「おい、翔ー」

俺を呼ぶのは大佐こと凜である。手には三つのコロネが握られている。

あの戦地で物資を獲得するどころか、選んで購入するなど化け物の技としか思えん。マジで。

「翔…、凜…」

寂しそうな目で我等を見てくるのは心太である。彼の手元には物資が無かった。

話を聞いた所によると焼きソバパンの気分で探していたら流されたという事だ。

馬鹿め、常人が選んで買うなど出来る訳が無からうが！
凜大佐みたいな化け物に生まれ変わって出直して来い！

戦場の帰り道、自動販売機で飲み物を買って俺達は教室に戻って来た。

俺は、マーガリンロールを食いながら、ぐびぐびコーラを飲んでいく。

凜は、コロネを頬張りながら、ココアをちびちび飲んでいる。

心太は、涙目で、ヤクルトをちゅーちゅー飲んでいく。

「お腹減ったぜー」

「恵んでくれたりする、人とかいないのかＹＯ？」

「恵んでくれたりする、優しい人とかいないのかＹＯ？」

「恵んでくれたりする、超優しい人とかいないのかＹＯ？」

「恵んでくれたりする、最強に優しい人とかいないのかＹＯ？」

「恵んでくれたりする、神がかり的に優しい人とかいないのかＹＯ？」

「恵んでくれたりする、神とかいないのかＹＯ？」

うるさい馬鹿（心太）は無視するのが今の俺と凜の暗黙の了解である。

というか最後は、とうとう人ではなく、神頼みになっているじゃないか！

「うるさいよ、黙ってよシンシン」

「そ、そんなあ、というかシンシンはやめろって！？」

「うるさいからだよ」

「もう…いいもん」

我慢の限界が来たらしく、凜は心太を一刀両断に掛かったみたいだ。ついでに凜よ、シンシン（進藤心太のあだ名であろう）とは良い発想だな。

最終的に拗ねてしまった心太は、ヤクルトをちゅーちゅーしながら、の字を書き始めた。

「…はい、どうぞ」

凜は飽きれてコロネを一つ心太に渡そうとした。
それを見た瞬間、心太は犬を思わせるキラキラ眼で凜を見つめている。

【心太はこちらを見ている、仲間にしますか？】

何故か、そんなフレーズが頭に浮かんできた。

そして仲間にされたであろう心太は、「あーん」とか言いながら口を空けている。

やはり馬鹿は馬鹿であつたか、その瞬間バチンとコロネが心太の顔面に叩きつけられた。

調子にノリ過ぎだぞ心太！

というか、武器【コロネ】で男子高生を気絶させるってどういうことだ！？

コロネが全然変形していないっていうのはどういうことだ！？

…やはり、凜は化け物というカテゴリーが正しいのでは無いだろうか？

第3主義「禁句とタブーと単純馬鹿」

俺は今、片手にCCレ。ンを持ち屋上でぼーっとしている。
今日の帰りに凜にプリンアラモードDXを奢る羽目になっているからだ。

「やっぱり、二人とも上手いな」

二人とは勿論、凜と心太である。屋上から、男子・女子のサッカー部を眺めているとよく分かる。

それにしても心太、お前は意外と凄い奴だな！

一日に二回気絶してクラクラしていても部活には出るのか！感動だ！
まあ、一日に二回もタブーを犯す馬鹿の自業自得で起きた事体なのだが…。

ここで我が親友である、白瀬凜の禁句やタブーとは何かを語っておこう。

白瀬凜は、いわゆる性同一性障害なのである。

体は女である事を自覚しながら意識は生まれつき男だという状態だ。そんな彼女に対して女扱いをする事は最大のタブーにあたるのである。

もし、してしまった場合は般若様に変化をし対象に最大級のダメージを与える事となる。

意識を飛ばされる位はザラで今までで最悪の事態は…………。

いや、語るのは止めて置こう、思い出すだけで夜眠れなくなること
は必死だ。

「ん？もう6時か」

恐怖に飲まれていた俺は時を忘れ異次元を彷徨っていたらしい。

ガタガタ震える右手を落ち着かせ残っているCCレ。ンをぐいっと
一気に煽り、校庭に向かった。

「よう、お疲れ」

「ん、翔か、どもども」

「相変わらず上手いな」

「翔も、かなり上手いのにな何で高校ではやらないのかな？」

俺は、校庭で帰り支度を整えている凜と喋っていた。

そして、聞かれたく無い質問をされてしまった、特に凜には絶対に
言いたくないわけだ。

俺は夕焼け空に目を泳がせ、質問回避方法を模索していた。

「ん？どうしたのかな急に黙っちゃって？」

気遣わしげに俺を見てくる親友。

「いや、ちょっとUFOを見つけたただけだ」

「えー？、どこ？どこ？どこ？」

「…」

「いやー、軽い冗談だって分かってたよ」

「うむ、UFOは親友の頭の中にありそうだな」

「それってどう意味なのかな？」

アッハッハと笑う俺。

誤魔化し率100%のUFO発言を真に受ける奴がいるとはな。

こいつも違う意味で馬鹿なのかも知れない、つまり単純馬鹿とでもいうカテゴリか？

「ねえ、翔、どうやって死んでみたいかな？」

爽やかに笑う俺に羞恥と殺意の念で睨んでくる親友。

「よしっ、シースルーに行くぞ」

「えっ？あっ、うん、今行くからちょっと待っててー」

頬を綻ばせながら、喜んでデラックス♪デラックス♪と口づさむ親友。

さっき、怒っていた事を一瞬で忘れてしまったようだ。

やはり、我が親友は単純馬鹿というカテゴリで間違っていないかったようだ。

第4主義「炭酸爆発！」

【シースルー】、この地区の女子高生達に最近人気の甘味処である。落ち着いた内装と骨まで溶かしそうな、あまーいスイーツが売りの店だ。

そんな店は、男性に対しては非常に入りにくい店に値するわけだがここに俺がいる原因は、俺の目の前で至福の時だと言わんばかりの顔を浮かべている目の前の親友である。

「これは、正に至福の時だねー」

やはり、親友にとっては至福らしい。

俺にとつては、拷問に近いが主に精神的な意味で。

「早く食つてとつと帰るぞー」

「何言つてるの！？最高だと思わないの？

というか何で翔はココに来てメロンソーダしか頼まないわけ？つまる所翔は炭酸狂だよね？」

我が親友は、マシンガントークを繰り出した。

【松葉翔に280のダメージ！！】

280の判断基準がわからない人は、ギ○スラッシュと同程度と思つておけば良い。

一部、事実を付かれた所が大ダメージのポイントである。

朝から俺が飲んでいた物は、サイダー、コーラ、CCレ○ン、メロンソーダ。

確かに、俺は炭酸が好きだ！大好きだ！、あのシュワシュワの快感が堪らない！

だが、炭酸狂とまで言われると黙認するわけにはいかない！

「はっ、凜だつて激甘党じゃないか？」

「そうだよ、僕は激甘党だよ？甘味最高！！！」

反撃したつもりが開き直られてしまった。

【松葉翔に800のダメージ！！】

800の判断基準がわからない人は、マダ。テと同程度と思っておけば良い。

こ、これは温和な俺でも少し位の暴言は許される筈だ！

「甘味？、太るぞ？、豚になるぞ？、糖尿病になるぞ？」

女子に豚等の暴言は禁句である。問答無用で殴られる可能性があるからだ。

しかし、我が親友の場合には普通に使用出来る暴言である。

「ふん、翔だつて炭酸ばっか飲んでると爆発するよ？」

炭酸が溜まりすぎて爆発すると言いたいのだろうか！？

そんな爆弾みたいな危険物を政府は無視をしているとは何事だ！

日本は戦力を持つてはいけない国だから、といって他国にばれずそんな物を作っていたとは！

いつの間にか、日本では自動販売機で爆弾が売買される時代になっていたというのか！

爆弾1個150円とかで買えるとは、どのような異常事態だ！

というか、そんなの絶対有り得ないだろうが！！！！

…壮絶な内心ノリ突っ込みである。

「おーい、戻ってきなよ」

「え？、あ、えっと、俺今何してた？」

「爆弾！爆弾！とか叫びまくってたよ、やばい変質者ぽかったよ？」

松葉翔は自爆した。

【松葉翔に1014のダメージ！！】

1014の判断基準がわからない人は、最大HPを越えてると同程度と思っておけば良い。

俺は、今、穴があつたら入りたい！

俺は、今、穴があつたら入りたい！

俺は、今、穴があつたら入りたい！

「俺は、今、穴があつたら入りたい！！！」

口に出てしまった。

『きゃー、とうとう危険人物が爆発させるみたいよ！穴…いえ、防空壕に避難しなきゃー！』

ちよつと待って、お客様方。

俺は別に爆弾を爆発させるから自分だけ助かる為に穴もとい防空壕とかに入るわけじゃないよ！？

なんで誤解なさるんですか？俺がヤバイ事ブツブツ言ってたから？そりゃ、納得だ！俺もそんなヤバイ人がいたら逃げるし！

というか そのヤバイ人「俺 なわけだよね…？」

自覚した途端、俺は爆発した、顔が真っ赤になって

野口さん2名をテーブルに叩きつけ奇声をあげながら走り去った。

「ちょっと、翔が狂ったせいで僕も恥ずかしいんですけど！」

とかの叫びが聞こえた気がしたが気のせいだ！

第5主義「独裁政権」（前書き）

少し自分的にスランプ気味です。
頑張れ自分の脳味噌！。

第5主義「独裁政権」

「おはよー、炭酸爆発男ー」

この親友の一言から俺は最悪の朝を迎える事となった。

朝の登校中から担任の藤森先生が来るまで、ずっと弄られ愚痴られ続けた。

俺は、危うく炭酸恐怖症になる程のトラウマを受けそうになった。うむ、危ない、俺から炭酸を抜いてしまったら生存理由が無くなってしまう所だった！

「よし、席つけー」

この発言を聞いて、未だ文句言い足りないのか舌打ちをして親友は席に戻っていった。

……朝っぱらから疲れたな、うん。

格ゲーで表すならHPゲージが既に赤で点滅しているだろう。

「お前等、来週に体育祭がある事は知っているだろう」

藤森先生は黒板にゴリゴリと文字を書き連ねていつている。

【・短距離走 ・障害物競走 ・大縄跳び ・リレー ・旗取り合戦】

「そこで短距離走は全員参加競技で、他は一人二つずつ参加して貰う。

まずは、リレーだが適当に速い奴を割り振っていくぞ」

「千葉！、進藤！、松葉！、安藤！、白——」

「――あの、先生――」

藤森先生の言葉の途中で割り込む我が親友。

「ん？なんだ白瀬？」

「僕、リレーより障害物競走がいいです」

「了承だ！自主性があっていいな白瀬！」

「あの！先生！」

「ん？なんだ進藤？」

「俺も障害物希望しまっす！」

「却下だ！協調性を重んじる進藤！」

心太ドンマイ！

しかし、なんとも清々しいほどの差別である。

「では、次は、大縄跳びを決めたいと思う」

「ここに戦力を告ぎこむのは勿体無いので、クズを適当に詰めていくぞ」

うわっ！何このセンコー！？。

これが先生で本当に大丈夫か日本？

…うん、ここで名前を呼ばれた人は可哀想過ぎるので伏せて置くと

しよう。

この後も、藤森の先生らしからぬ発言と共にメンバーが決められていった。

「体育祭か、楽しみだね、翔」

ニコニコと笑って話しかけてくるのは我が親友である。
うむ、正直俺もクダナイ行事だとは思うが楽しみである。

「差別反対！差別反対！差別反対！差別反対！」

藤森独裁政権の被害者である心太。

その叫びと、教室の隅で固まって泣いている藤森先生曰くクズの皆様はスルーすべきだろう。

藤森先生……アンタ、本気で先生なのか疑わしいよ。

第6主義「恐怖の体育祭会議？」

ピシャンと開けられたドアから教室を覗いている男がいる。

……あれは確か…男子サッカー部部長の二年の長谷川先輩だったかな？

面倒見が良く、優しく、おおらか、一点を除いては完璧な先輩である。

その一点とは、サッカーになると酷く恐ろしいという所だ。二重人格とは困ったものだ。

というか、この先輩も馬鹿なのではないだろうか？主にサッカー馬鹿というカテゴリーでだ。

などと、多少失礼な事を考えていると俺等を見つけて走りよってきた。

しかし、意外性など皆無で予想通りの行動だ。

「よ、進藤君、白瀬君、松葉君」

「勧誘なら間に合っていますか？」

そう、彼の訪問目的は後輩への顔出しと

…俺への勧誘である。

最初は丁重に断っていたのだが、日課のように勧誘してくるので先輩とはいえ乱暴な口調になってしまうのも致し方ない。

「いやあ、今日は違う用事だったんだけども入ってくれるなら大歓迎だ！」

「いや、入りませんから、で？用事とはなんですか？」

なんと勧誘では無かつたらしい！大雪注意報を発令せねば！
だが、このまま、ずるずる勧誘にいつてしまふ前に本題へと会話を
展開させる。

「用事とはな、体育祭でウチのクラスと君たちのクラスが同じ色に
なったという事だよ」

「そうですか、それで？」

「率直に言つとだな、優勝を目指そうと思って【1・6】の視察に
来たというわけだ」

先輩は、俺達にそれだけいうとニツコリ笑って教卓の方に歩いてい
った。

注目する俺等とクラスメートの視線を受けて先輩は……………

「テメエエラアア！！！！今回の体育祭の優勝は赤で決まりだアアア
アア！！」

いきなり吠えた。

な、なにゆえサッカーモードへ移行しているのだろうか！？
縮み上がるクラスメート一同を無視して、話を進める先輩。

「もし！もし！！もしイイイ！！！！、
テメエラ糞ガキ共がウチラアアの足引つ張つたらどうなるか解つて
るんだろうなアア？」

ドスの効いた声で吠えた蹴っている長谷川先輩。

クラスメートは涙目でこくこくと首を縦に高速回転させている。
しかし！、我等のクラスで一人だけ違う行動を示す者も居た。

それは我が親友である。先輩！と思いつき呼びかけ、多分我等を弁解する言葉を述べるであらう。
これぞ救世主である！

「ア？なんだアア白瀬？」

「僕達のクラスが負けるわけ無いですよ、一緒に優勝しましょう」

ちよつとまてええええ！

お前も先輩よりの意見か白瀬！？

火に油だろ！大炎上でバーニングするに決まっておろうが！

「白瀬エエ！よく言った！！！」

お互い友情を称えあうように手を握り合う二人。

二人ともくつくくつと悪人っぽく笑いつつ

【ビリへの拷問一覧表】とやらを作っている姿は正に異様だった。
体育祭が楽しみから恐怖へと変った一日。

多分コレから我がクラスは死に物狂いで朝練習、放課後練習、深夜練習、等をしそうである。

第7主義「真剣にランニング」

「ところで親友よ」

「ん？」

「今、何を読んでいるのだ？」

我が親友は一枚の紙をピラピラと振り俺に見せてきた。

「それは、もしや【ビリへの拷問一覧表】という奴ではなからうか？」

「うん、そうだよ」

親友はニツコリ笑い肯定してきた。

そこ笑うところじゃないから！恐いから！

「例えばね、生かさず殺さずの水——」

「——それ以上言わないで！！！」

人の話に割り込むのは無礼である。

しかし、ココは割り込まなくてはいけない時である人として！
というか、このお方は何をおっしゃるつもりだったのだろうか！？

「んー……」

渋々ながら黙ってくれた我が親友。

この後、俺と親友はランニング練習をする事となった。
親友がとても真剣に走っていたのは何故だろう？
偶に「きゃー！！来ないでー」とか叫びながら……。

第8主義「GTFとしりとり」(前書き)

一応、体育祭編本番に入りました。
恐いですけど評価とか欲しかったりする今日この頃。

第8主義「GTFとしりとり」

「私立国一高等学校しりつくにいちこうがっこう、第30回体育祭を始めます！
まず最初に開会の言葉を校長先生からお願いします」

「ええー皆さん。今日はお日柄も良——」

「良過ぎるので、立ったまま長話を聞くのはダルイので解散だ！」

マイクを奪って話を遮るのは我が担任藤森だ。

遮られた校長なんだか涙目になってるよ！？

つてか藤森先生何やってるの！

いや、心情的に言えば藤森先生に大賛成だけどさ。

最初っから色々問題はあが、とうとう国一高校の体育祭は始まった。

「いやゝ、我等がグレイトティーチャー藤森は流石だったぜ！」

「僕も長話聞くのかつたるかつたからね、正直生徒一同大喜びだしね」

GTFか…いや、なんでもない、なんでもない。

確かに心太よ、あの人は色々な意味で凄い人だがティーチャーかどうかは分らんぞ！

「いや、本当にあれでいいのか？、校長が明日にでも自殺しそうな

顔だったぞ？」

「いや、俺は今日中にでも自殺すると思っぜ！」

不吉な事を言うな太！

最初に言っただのは俺だけど！

「んー、翔はダメなのかな？あれじゃー」

「当然だろ、常識的に考えてあれはマズイと思っぞ凜」

「ふーん、でも内心嬉しかったんじゃないのかな？」

「うつ……」

「翔って偽善者なんだねー」

くそっ、返す言葉が無いではないか！

しかも、ニツコリ笑いながら偽善者のレッテルを貼り付けるな凜！
傷つくだろうが！

「偽善って最低だと思っぜ」

「うんうん、そうだよね」

「カス野郎！」

俺は粕じゃない！

「ス力野郎！」

ス力でもない！

「カビ野郎！」

細菌でもない！人間だ！

「貧乏野郎！」

貧乏なのは凜に奢らされたからだ！

「ウジ野郎！」

だから人間だって！

俺を調子に乗って罵倒する心太と凜。

しりとりのように聴こえるのは気のせいだろうか？
暴言しりとりってやられると地味に傷つくね、うん。

第8主義「GTFとしりとり」(後書き)

かす↓すか↓かび↓びんぼう↓うじ

上記がしりとりになっていました、念の為公表。

第9主義「無名ファイト！」

・短距離走（100m）
全員参加競技。

・障害物競走
親友である凜が参加予定である。

・リレー
俺と心太が参加予定である。

・旗取り合戦
1年から3年混合競技である。三人とも参加予定である。

・大縄
…がんばれ。

精神的にぼろぼろにされた俺は、今クラス席で短距離走を観戦している。

今、我がクラスの男子生徒の一人が必死に走っている…現在ビリ（6位）だけど。

【白！速いです！速いです！】
スピーカーから実況の声が聴こえてくる。

【赤！諦めずに頑張ってください——】

【——クズウ！頑張れやアア！さもなくばアイアンメイデンが待ってるぞオオ！】

へ？何この実況…？

訝しげに放送席を見るとそこには……マイクを奪い叫ぶ長谷川先輩。

【えー、少し放送事故が起きました、まことに申し訳御座いません】

放送部冷静だな、オイ！

教師によって追い払われる長谷川先輩を気にもせずに実況とは。
将来、名アナウンサーになるかも知れん、マジで。

【白一着でゴールです！続いて緑！次に青！次に黒！次に……黄色？】

【いえ、赤の選手が必死に追い上げています！赤も黄色も頑張ってください！】

死にたくなーい、とか叫びながら走っているクラスメート。
ゴールと同時に地面に倒れ伏した。

【あ、赤五着です】

名アナウンサーも流石に怯みつつ結果を伝えた。

多分クラスメートにはその生還宣言は聞こえてはいないだろう。

名も無きクラスメート（藤森曰くクズの一人）良くやった、お疲れ様。

そして、そろそろ俺達も召集場所に行っておくか…。

第10主義「アイアンメイデン」

その後も【1 - 6】メンバーは、順位は違えど6位になる者は現れなかった。

そして、次は我が親友の番である。面子の中に陸上部が一人いるが凜ならば一位で来れるだろう。

因みに、女子短距離で召集された時の般若面は恐ろしかったと追記しておこう。

「位置について、よいい」

パンツと空砲が響き、凜達はスタートした……否！

一人だけスタート出来なかった者がいた、自分の足に躓きコケた我が親友である。

うおい、本番で何やつとるんだ己は！

凜は、即行で起き上がったものの既に30mほどの差がついている。しかし、それを一人、又一人と追い抜かしていく爆走っぷりを披露して二位でゴールした！

一位になった筈の陸上部女子が呆然と凜を眺めている。

やはり…凜は化け物である……！！

「凜凄すぎだぜ！」

凜に話しかける心太。

確かに俺も、ひどく同感である。

「……一位になれなかったよ」

落ち込み気味の我が親友。

お前は、後どれだけ化け物染みれば気が済むというのだ！

「いやいや、良くやっただ良くやっただ」

内心とは違い一応宥めてみる、優しいな俺！
だが、凜の反応は――

「僕、拷問を受けなくちゃ……えーつとアイアンメイデンどこ置いたんだったのかなー」

待て待て待て待て待て待て！！！！
本当にアイアンメイデン持って来てたのかよ！

それは放つて置いて、今は我が親友の自殺をを塞がねば！
……放つて置いて良い問題かは大いに疑問を感じるが。

「いや親友よ、無駄な行為は止め給え」

ジョークで済まそうと俺は、アッハッハと笑いながら宥めてみた。

「無駄じゃないの！ 僕の罪の証なの！ 巫力も上がるの！」
ふりよく

「シャー。ンキングじゃあるまいし巫力なんか上がってたまるか！」

「それでも受けなくちゃいけないの、貢献出来なかった僕の罪滅ぼしなの！」

二位でアイアンメイデン決定なの！？

「じゃあさ、俺達が一位になって凜の分取り戻すってのはどうさ？」

妙にクサイセリフをさらりと言ったのは心太である。

心太！感動した！漢のセリフだな！

…あれ？俺達…？、達って誰の事だろうね？……アハハハ。

「待て心太！俺はそんなこ——」

「——本当？、出来なければ心太達にもアイアンメイデンしちゃうよ？」

言葉を遮るな親友！

「ああ、大丈夫だぜ、俺と翔が一位を取ってきてやるぜ」

ちよおーい！俺まで巻き込むな！

アイアンメイデン恐いから！あの棘棘体に刺したら死ぬから！

「…分かった、アイアンメイデン磨いて待ってるね」

心太が凜を説得したのはいいけど…本当に良かったけどさ。

これからが恐いよ！

短距離走一位取れなかった時、俺はあの棘棘に包み込まれて…。

いや…絶対に一位を取るう！、それ意外の事は気にしたら負けだ！

第11主義「高揚感」（前書き）

今回は少しコメディ薄めです。

それと途中から心太視点が入りますが、
翔視点でのみ読んでいきたい方は読み飛ばしても
本編の進行に大きな問題はありません。

第11主義「高揚感」

死後の世界には何があるのだろうか？

… 転生だろうか？

… 天国だろうか？

… 地獄だろうか？

… 無だろうか？

俺個人の希望で言えばアルカディア理想郷希望である。

俺は理想郷への道程を、一步一步と進んでいつている。

因みに、心太は道程を途中で折り返し生還を果たした。

というか、心太の短距離の時の面子は全員帰宅部だったので一位で当然であろう。

…… 予め心太はそれを知っていたから、軽々しくあんな事を言えたというのは考え過ぎであろうか？

「位置について、よいい」

パンツと空砲が響き、4人の走者が一気に飛び出した。

4人とは、俺とサッカー部男子3人である。明らかに面子悪いだろコレ！

残りの2人も遅くは無いのだが、前方の4人に比べると兎と亀である。

「翔ー！、頑張ってー」

走っている最中に、我が親友の声が微かながらに聴こえた。

なぜだか知らないが妙に鼓動が早くなり、足が軽くなった気がする。いや、俺はこの感情を知っていた、昔の時のような高揚感である！小学校、中学校と続けていたサッカーをしている時に感じていた感情。

【進藤心太】視点

「無茶だと思つて持ち出したつもりだったんだけどなあ」

凜が本気で俺達に拷問しないのは分かっていた。

だから俺は約束を果たせなかった時にアイアンメイデンをすると豪語していた

白瀬の反応を見るのを楽しみにしていた。

しかし、イレギュラーというものが発生した。

友人（翔）の脚力からいつて一位は無理だったはずだった。

中学時代のアイツなら、まだしも高校で落ちていたタイムでは不可能：のはずだった。

だが、現実にはグングンと二位との差を広げ一位を独走するアイツがいた。

心底楽しそうな表情、中学の時に一緒にサッカーをやっていた時と同じ表情だ。

納得した、そういう時のアイツはミラクルだ。

小学生の時に俺はそれを実際に体感させられている、アイツのミラクルをだ。

アイツは覚えているだろうか？

小学生の時に一度だけしか会ったことはなかったが、俺にとっては強力な印象を与えたアイツは…。

第12主義「暇」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、」

あまり教育上良さそうでは無い声を、あげているのは俺こと松葉翔である。

100mながら高校に入って全く部活をしていなかった俺にはキツかったであろう。

そんな俺に、アク。リアスを手渡してくれたのは我が親友である。

…微妙に炭酸飲料じゃないのが不満だが、感謝すべきだろう！

「遅かったよ翔！」

やっぱ感謝したくねえ！

俺必死に走って一位取ったよね！？

「ベストより0.5秒も遅いなんて鈍りすぎだよ」

「無理言っな！久しぶりにしては十分だろう！」

「ふん、それでも女子の僕よりベスト遅いんだよ？恥ずかしくないのかな？」

調子良い時だけ女子アピール！？

というか、我が親友より速い奴なんてそう居ないって！

「それじゃー、納得した所でアイアンメイデン逝ってみよー」

いやいやいやいや！！！！

なんで楽しそうにアイアンメイデン引きずってきてるの？

俺、全然納得した覚えないからね！

というか、ここはきっちり断らないとヤバイ！

「いや、一応、俺一位取りましたよね！？

だからお願いしますアイアンメイデンをしまってくださいませ！」

「…チッ」

我が親友は舌打ち一つして、諦めてくれたようだ。……良かったー

「あーあ、やる事なくなちゃって暇だよね」

暇つぶしだったの！？

暇つぶしで、俺をキルしようとしてたの！？

「それなら競技見ればいいではないか！体育祭なんだから！」

「……ねえ翔、今からやる競技、大縄なんだよ？」

……。

「……そっか、確かに暇なようだな」

妙に納得しちゃったよ俺。

……うむ、一応頑張ってくれ、藤森曰くクズの皆様方。

第13主義「賭け」

「うっし、賭けとかしてみようぜ？」

冒頭から行き成り怪訝な事を言い出したのは心太である。

「賭けっていうのは何なのかなー？」

「今からの大縄でさ、俺等のクラスの順位を当ててみようぜ」

「「「6位^{ビリ}！」」」

三人の声が同時に重なった瞬間であつた。

「…心太よ、賭けにならないと思うのだが？」

「うん…僕もそう思う」

凜も賛同の意を告げる。

「じゃ、じゃ、じゃあ、飛べる回数ってのはどうだ？」

焦りながら内容を変換する心太。

ふむ、回数か、流石に0回もありうるけど1回とかも有り得る。
マグレで5回という可能性もゼロとは言い切れないしな。

確かに面白いが――

「誰も当たらなかったときはどうするんだ？」

「んー、僕は一番近かった人でいいと思うけど？」

「それでいいぜ」

では、俺はどうしようか…？

やはりココは…！…！…！

「0回！」

む、心太と被ってしまったか。

流石、我がクズメート（省略系）は信頼があるな、勿論悪い意味でだが。

俺は、プルプル拳を心太の目前に見せ付けた。

心太も、俺に思いつきり拳を見せ付けてきた。

俺と心太の考えは同じだろう、俺はその拳を思いつきり振り上げ――

「ジャン・ケン・ポン…！！！」

俺は、パーを出し、心太はグーを出した。

心太は相変わらずグーばかり出すな、学習しろ馬鹿め！

現在の所、俺と心太のジャンケン戦歴は、53勝0敗である。

結果、俺は0回に心太は1回に賭ける事になった。

…ん？ああ、そう言えば――

「凜はどうするんだ？」

「ん、僕は2回に賭けるよー」

そう言ったかと思うと我が親友はニツコリ笑い――

「一番近い人だから2回以上なら僕の勝ちだよな？」

とんでもない事をのたまった。

いや、ルール上そうなんだけどね、なんというかね…。

「「せこー!!!」」

そして、俺と心太は何度目かも分からないハモリを披露した。

その後、賭けでの罰ゲームはありきたりな一日奴隷権となった。
っておい！、そんなありきたりでいいのか！

校庭に6本の縄が横たえられている。

横に並ぶのは1年の大縄の選手達である。

その中の赤の選手に俺は、内心願いをかける。

【1回も飛ばないでくれ！】

うわっ、俺って最低！

ただ、【奴隷になるor我がクラスが1回も飛ばない】

という条件なのであれば、特別なご趣味の方以外は、奴隷は選ばないであろう。

どうせ、何回飛んだとしても結果はビリだろうしな。

「せーの」

俺が内心で必死に自己弁護している内に大縄が始まったようだ。
さあ…結果はどうなる？

第14主義「国一高校の七不思議」

パシンパシンと唸る縄の音。

そして我がクズメートがどうなっているかというと――

「ね、ねえ、一応僕の勝ちでいいのかな？」

「これが夢で無ければそうなるだろうな」

「いや、夢に決まってると思うぜ」

ギユウツと抓られる、俺と心太の頬。

「「痛い！痛い！」」

重なる俺と心太の声。

というか、自分の頬で試してくれ親友！

……あれ？…痛い？、という事は――

「夢じゃないんだね」

そついう事になってしまっではないか！

何度目を擦つても映る光景は変わらなかった。

我がクズメートは、他のクラスが飛び終えて座っている中、未だ飛び続けていた。

彼ら（翔、心太、凜）は知る由も無いが、
この現象は奇跡やご都合主義で生まれた事では無かった。
ある夜クズメート達による公園での出来事――

『おい、何で俺等集まってるんだ？』

『大縄の練習なんてやったってウチラじゃ無理だってー』

『皆の衆！我々には意地というものは無いのか？、
藤森のヤロウにクズと言われた屈辱晴らさないでいいのか？』

『でも、無理なもんは無理でしょ』

『……本音で言おう、我々は生への未練は無いのか？』

『『『は！？』』』

『これを見たまえ！』

『『『これは！！？』』』

『そうだ、教室で拾った【ビリへの拷問一覧表】だ！』

『な、なんだ、この内容は！？、長谷川先輩と白瀬さんは鬼ではないのか！？』

『…で皆の衆、大縄の練習はどうする？』

『『『やる！！！！、やらないや死ぬ！！！！』』』

『ついでに藤森のヤロウに、目にもの見せてやろう！』

『『『おー！！！！』』』

こんな逸話を知らなくても彼等（翔、心太、凜）にも分かる事はある。

「つまりは、賭けは僕の勝ちだよ…ね」

我が親友は苦笑いをしながら確認を取ってくる。

気持ちには痛い程に分かるがな、我がクズメート達に何があったのだろうか？

この後この件は、国一高校の七不思議に残る事は間違いないであろう。

「で、俺と翔は何をすればいいんだよ？」

心太の問いに、我が親友はウーンを首を傾げ考えて――

「まだ、取っておくかな？」

いや、奴隷権なんか持って置かれるのすんごい落ち着かないんですけど！

「凜よ、出来れば今決めてくれないか？そちらの方が気楽なのでな」

「そんなこといつちやうんだ」

凜は、フッフと怪しく笑い――

「じゃー、明日にでもメイド服着て登校してくるなんてのはどうかな？」

俺と心太に死刑宣言を持ちかけた。
こう言われては俺の返す言葉は――

「いえ、凜様、ごゆるりと考えて貰って結構なのでそれだけは、おやめ下さいませ！」

「フッフ、それでいいんだよ、翔」

これから先、俺は凜に逆らえないであろう…。
いや元々逆らえないけど、流石にメイド服登校という精神デストロイを食らってしまったら

もう学校に来れる自信は皆無である。

第15主義「理由」

障害物競走は午前最後の競技かつ、我が親友が出場している競技である。

見学していると、心太が俺に疑問を投げかけてきた――

「翔さー、何で凜は障害物競走なんて選んだだよ？」

「いや、心太も障害物希望したではないか」

「俺は、リレーより楽しそうだったからだぜ！」

自信持って偉そうにいう心太！

理由がとてつもなく情けないから！

と、言っても心太が何でそんな事を言うのかは、よく分かる。網に足を取られて暴れている親友、理由は、それで十分だった。

「白瀬はさ、普通に走った方が速いと思うぜ」

「それは、俺も同感である」

「現在三位だぜ、こりゃやばいんじゃないか？」

「それは、同感しかねる」

「なんでだYO！」

何故か懐かしい気がするイントネーションで突っ込んでくる心太。

何故かと言われれば、俺は親友が障害物を選んだ理由を知っているからだ。

「まあまあ、心太よ、見てれば分かるぞ」

訝しげに睨んでくる心太の目線をよそにして俺は競技に目を向ける。

凜は、網をぶち切って抜け出し、平均台を通る。

そして、最後の直線に用意された最後の障害が選手達の前に現れる。その瞬間、凜の目つきが変わった――

「あれかＹＯ？あれなのかＹＯ？白瀬が障害物を選んだ理由って、あれなのかＹＯＯＯＯ！？」

そうだ、心太。

あれなのだよ、凜が障害物を選んだ理由は………アンパンだった！

アンパンを見た瞬間、我が親友は速力をあげ、ぴょいとジャンプした。

そのまま口を大きく開けて、がぶつとアンパンに食らいついた。

………しかも６人の選手に用意されたアンパン全てをだ。

我が親友は、そのまま笑顔で口をもぐもぐ動かしながらゴールテープを切った。

第16主義「くっつばいな」

俺と心太と凜は、今学校の屋上で昼休みをとっていた。体育祭午前の部が終了して、午後の部までの休憩&昼食の間である。

「ふっふっふっ、これを見たまえー」

凜の言葉に振り向くと、何か四角い箱を持っていた。

……なんだ？ もしや爆弾？

俺が恐る恐る、質問してみると――

「ん？ これはね、僕が作ったお弁当だよ」

【体育祭とかだと、なんかそんな気分になっちゃうよね】

とか言いつつお弁当を開き始める我が親友。

こういうところは女の子っぱいけどな。

だが、それは断じて言わない！ 命が惜しいから！

パカッと、開いたお弁当を見ると……真っ黒だった。

凜の心の色？、いや、普通に海苔の色だけどさ。

箱一面に敷き詰められた、オンリーおにぎりを見ていると、

やっぱり、こいつは男っぱいな。と、妙に納得してしまった。

「へえー、作ってくるなんて妙に女の子っぱい所もあるじゃないか
YO！」

馬鹿だ！ こいつは馬鹿だ！

俺が命の危機を感じ取り、黙っていた言葉を言ってしまった馬鹿（

心太)。

馬鹿は、我が親友に一撃で伸されて意識を失った。

マジで学習能力をつけるよ心太！そんな事してるといつか死ぬぞ！

いや…というより今は本当に生きているのだろうか？

気を失っただけ…だよな？、…深く考えないでおこう。

「ねえ、翔、食べていいよ」

「ん？いいのか？」

「妙にウキウキして作りすぎちゃってね」

こういうところは子共っばいな。

俺は、思ったことを馬鹿(心太)みたく口に出さず、おにぎりを1個手に取って食べ始めた。

「やっぱり中々美味しいな」

いや、おにぎり、なんて誰が作っても大して変らなく思っけどさ。しかし、味に差が出るのは不思議な話である。

「ありがとー」

「あれ…？」

「ん？どうしたのかな？」

「いや、塩か？味の元か？何を振って食べているんだ？」

我が親友は、自分のおにぎりに何か白色の粉を振って食べていた。

「これはね、砂糖だよ」

待て！待て！待て！待て！

凜の甘い物好きは分かるが、おにぎりに砂糖なんてかけるなよ！

「美味しいよ、翔もかけたいのかな？」

……うむ、味覚とは人によって違うものだな、仕方無いものだよな。

俺は凜の申し出を丁重に断り、ノーマルなおにぎりを食す事にした。しかし、我が親友は、その砂糖おにぎりを5つも美味しいと言いながら食べていた。

よく5つも入るものである。

……あ、そうだった。

その上、アンパンをさつき6つ食べたのも計算に入れるとフードファイタークラスだな。

俺は、その種を親友に伝えと――

「甘い物は別腹だから、まだまだ食べられるよ」

との事だった。流石化け物である！

第17主義「思い出さないで！思い出さないで！言わないで！」

「なあ親友よ、……コレどうする？」

コレとは、食事中に気絶させられた馬鹿（心太）の事である。

「ん？問題無いんじゃないかな？」

「いや、一応、午後の部の種目2つとも出場予定なのだが？」

俺が心配しているのは馬鹿では無く、当然体育祭の事である。

「大丈夫だよ、後10秒位待つてれば多分ね」

は！？凜は保険医でも呼んできていたのか？

いや、それは無いであろう、さっきからずっと俺と屋上にいるのだから無理である。

【がばっ！】

…がばっ！と突然音が聞こえたので振り返ってみる。

もしや、本当に保険医でも来たのではないだろうか？

だが、俺の目線の先には――

「あ、あれ？俺どうしてたっけな？」

行き成り目覚めた心太がいた。

「ね？大丈夫だったでしょ？」

「うむ、そうだな大丈夫だったな、良かった良かった――
つて！……ちょい待てえい！何故に凜は心太が目覚める時間が分かつたのだ？」

「乗り突っ込みだね、翔」

いや、俺の質問を無視しないでくれますか？

「炭酸爆発事件思い出すね」

いや、思い出さないで！

あんな事すぐに記憶から抹消して！

「あの時は多分――」

「――あああああああああ」

思い出さないで！思い出させないで！言わないで！

「ん？どうしたのかな？」

「……親友よ、人には封じておきたい過去というものがあるものなんだよ？」

「……分かった、黙ってるから、その病んでる顔やめてくれないかな？……本当に恐いから」

……俺はそんな顔していたのだろうか？ はてさて。

そんな会話をしつつ、最後には心太の目覚める時間が分かった理由を教えてくれた。

「大体10分間気絶する位の勢いで殺ったからねー」

理由を聞いても全く理解出来る範囲じゃなかったわけだが……。

第18主義「アレ」（前書き）

更新まで少し遅くなつてすみません。

第18主義「アレ」

「皆さん、席について下さい、これから午後の部の為の作戦会議を始めます」

という訳で、俺等3人組が教室に戻った後に作戦会議などというものが始まった。

因みに、今教卓で話ているのは、クラスの委員長である、名前は確か……何だっけ？

「まず、午前の部につきましては良くやったと思われます、特にクズ様御一行の健闘は素晴らしかったですね」

クズ様御一行ってどんな言い回しだ！？

丁寧風に言いつつもクズという単語を使うのはなんとも言いがたいものだ！

「……あの、委員長！、我々にも名前は——」

「——ありませんよね？クズ如きに名前がついたら、委員長という役職名で呼ばれている私が哀れでなりません」

……はい？少し整理しよう。

クズメイト達が名前を名乗ろうとした所、

我がクラスの委員長が遮り、丁寧に諭した？貶した？

……というより、委員長は拗ねてるんじゃないのか？

名前で呼ばれない事についての不満だろうか？

もし、そうならば、そういう相談は俺等にしても仕方ないだろうな。

誰にすればいいかは知らないが……というより言えないがな！

「それでは、クズ様御一行が納得なされた所で午後の部についてですが——」

そのまま、クズメートをスルーしつつ、説明を始めた委員長。

内容を要約すると、【リレー】と【旗取り合戦】を頑張れという事らしい。

「最後に、し、し、し、白瀬さんから激励の一言を是非お願いします」

顔を真っ赤にしながらペコリと俯く委員長。

我が親友に怯えているのだろうか？……十分に有り得まくる話である。

そして、我が親友は委員長の言葉を受けて教卓に上がった。

「じゃあ皆ー、午後の部も頑張ろうね」

簡単な言葉で締める我が親友。

片手に鞭などを持っていなければ普通の言葉だろうな。

……持っていないければの話だが

拷問に使う類の一種なのだろうか？

というか、いつの間に持っていたのだろうか？

ニッコリ笑って【頑張ろうね】何ていったセリフも

鞭の存在により【頑張らなきゃどうなるか分かっとなるんだろうな？

ワレエ！……！】と聴こえてしまう。

「じゃー、委員長さん、コレでいいのかな？」

「は、は、は、はい！」

委員長は、又顔を真っ赤にさせつつも頷いた。

…うむ、分かるよ委員長、怯えるなつてのが無理な話なんだよね？

「で、では、皆さん、白瀬さんに叩かれるのも楽しみですが……あ」

恍惚とした表情と語っていた委員長は急に現実に復帰したようだ。

コホンと咳を一つして、ワタワタしつつも言葉を続けた。

「え、えーと、ですから、白瀬さんの為にかく頑張りましょう
以上です」

【顔が真っ赤】、【恍惚とした表情】、【叩かれるのも楽しみ】、

【白瀬さんの為に】

も、もしや…いやアレは無いかな？

アレとはアレなのだが……。

委員長、アナタは我が親友に怯えてて顔を真っ赤にさせていただけ
ですよ？他意は無いですよ！？

なんというかね、凜も一応性別上は女性だし、委員長も女性だから
有り得ないですよ！？

第18主義「アレ」（後書き）

なんか、エライモノを書いてしまった気がします。

後悔はありません！

第19主義「重圧」(前書き)

今までで一番の短さかも知れませんが(汗

ついでにここ数日迷っていたのですが
一話を少しだけ内容修正いたしました。

第19主義「重圧」

【生徒の皆さん！昼休みが終了致しました、運動場にお集まり下さい！】

放送部の放送により、昼休みが終わり、俺等は運動場に移動した。

……【体育祭午後の部】の始まりである。

残り種目は下記の通りである。

- ・リレー
- ・旗取り合戦

その中、両方とも出場する俺は少し大変だと思われる。

ただ、旗取り合戦の為にリレーの手を抜く事など許されない事である。

理由は――

「リレーに出る奴等、お前等は先生の選んだ精鋭だぞ負けるなよ」

という自分勝手な藤森の一言と――

「はっ、精鋭様方の実力とやらをクズの我々に見せてくだせーよ」

という、クズメートからのプレッシャーと――

「テメエエエラアア、分かってるんだろうナアア!？」

という、長谷川先輩の釘打ちと――

「新しく面白い拷問を思いついたよ」

という、親友の脅しと――

「白瀬さんの為、なのでから分かっていますね？」

という、委員長の確認と――

「俺達に任せておいていいぜ！」

という、馬鹿（心太）の了承である。

そんな重圧の中でリレーの召集の放送が流れた。

「翔、行こうぜ！」

「……逝くか、心太」

「イントネーションおかしい気がするYO？」

「そうか？別に普通だと思うが？」

心太良く気が付いたな。

しかし！この場合、逝くの方が適切であろう。

「ふん、ま、いいけどさ、俺等精鋭様の力を見せてやろうぜ！」

…馬鹿の馬鹿な一言で何故か少しだけ気が楽になった気がした。

第20主義「六つの旗と選択」

「やったぜー！」

「うむ、それに楽勝であつたな」

アツハツハツと笑いながら俺達はクラス席へ移動中である。

つまり、リレーで一位を取り笑顔での凱旋だ。

期待通りながら、圧倒的な力を誇った精鋭達は皆誇らしい顔をしている。

「俺、モテモテになっちまいそうだぜ」

いや、心太だけはニヤケタ顔をしているが…。

「ハツハツハツ、それで性格がもう少しマシならばな」

「んだと翔……！」

「ほれ、冷静になれ女子が注目しているぞ」

「え、マジカ!？」

心太は、いきなり背筋をビシッと正し、表情を固め、軍隊風に行進し始めた。

しかし心太は、どんな表情をしても滑稽に見えるから不思議なものである。

「一位取ってきたぜー！」

クラスに戻りすぐ心太が叫んだ。
褒めて欲しいのだろうか？

「あつそ」

「それは、良かったですね」

「ふ〜ん」

「だから？」

冷たく返す我がクラスメート達。

………な、何ゆえ？、いや俺は褒めて欲しかったわけじゃないが流石にこれは寂しいぞ！

「翔ー、心太ー、お疲れ様」

声を掛けてきてくれたのは、我が親友である。
凜……お前だけだぞ労を労ってくれたのは！

「ちよい白瀬ー、何か周りが異常に冷じゃないKA！」

「ん？それは当たり前だよ」

「なんでだYO！」

「だって一位取るのが当然だからじゃないのかな？」

「いや、それでもさ……………」

「んー、皆、正直者なんだろうね、僕みたいに社交辞令とか使わないみたいだし」

凜は心太に現実をつきつけた。

我が親友は正直に答えてるつもりだろうが、凜の言葉は地味にききな！

……………って、というか凜！

最初に掛けてくれた言葉は社交辞令だったのかよ！！！！

「うああああ、誰か俺を褒めてくれＹＯ！！！」

とうとう心太は発狂しだした。

気持ちは分かるが落ちて着け心太、周りの人がひいているぞ！

「そんなことより、そろそろ僕達も旗取り合戦の召集場所いこうよ」

我が親友は、心太を完全にスルーしたな……………。

まあ、俺も発狂している馬鹿と同類にされたくないしスルーしとくか

「そうだな、じゃ行くか凜よ」

「うん、行こう行こうー」

「うわああああ、待ってくれＹＯ！俺を置いていくなＹＯ！」

校庭には、赤、青、黄、緑、白、黒、の六色の旗が風を受けてなびいている。

そして、その旗は校庭を正六角形を描くような形で配置され、その旗の下には、色事の1〜3年の代表選手が集まっていた。

我が赤色の旗の下に集まった戦士は

【松葉翔、白瀬凜、進藤心太、委員長、長谷川先輩、とその他の2年や3年の先輩方】

この戦士達により、【国一高校第30回体育祭】の最後の競技が行われるわけである。

「皆さん、生意気かと思いますが私の話を聞いてください」

委員長の声だ。

確かに、2年や3年の先輩がいる中で、1年の委員長が話すのは少し生意気に聞こえるかも知れないが、だが、ここに集まった戦士は本気で勝つ気であり、くだらないプライドなど持ち出したりはしないだろう。

「委員長、大事な事であれば是非話しておいて欲しいものだ、続けてくれ」

2年の長谷川先輩が普通モードで続きを促した。

というか、先輩達も委員長を委員長と呼ぶのか、なんか意外だ！いや、そんな事はどうでもよかったか……。

「はい、分かりました、旗取り合戦は最後の競技であり、

又、唯一の他学年混合競技で、配点がかなり大きい競技なのです、しかしながら私達赤組は今までの所、他のクラスより大幅に得点を得ているので

ビリにさえならなければ優勝が確定されるポジションにあります」

委員長はスウッと息を吸い込んでから話を続けた。

「で、ですが、ココで旗だけを守る事に徹すれば最初にリタイアする事は無いと思われます、つまり優勝が確定します、皆さん、どういたしますか？」

- ・ この競技を守りだけに徹し優勝を確定するか
- ・ ……それとも、最後も真剣勝負で戦うか

この二点での選択か、……俺等は優勝しにきた。だが、正直な所、俺は最後の競技も楽しみたい！皆はどう思っているんだ？

第21主義「旗取り合戦 前編」(前書き)

旗取り合戦についての説明が
伝わり難かったらすみません。

……アレ？この作品コメディですよね？

旗取り合戦編が少しコメディっぽくないような(汗

第21主義「旗取り合戦 前編」

赤組って好戦的だな……。

あの後、全員が「戦場を前に逃げられるか！」的な意見だった。

我が親友も「ここで逃げちゃ漢じゃないよね」とか言っていた。
って凜は一応女だろが！

【ピンポンパンポーン、旗取り合戦に参加の皆様へですが怪我等については十分注意をお願いします、
又、今からでの参加取り消しも認められますので具合の悪い方は今のうちに担任に伝えておいて下さい、以上放送部からでした】

怪我等への注意か……。
まあ、そうだろう、この競技はかなり危険な競技となっているからだ。

ルールを軽く説明すると――
自分の組以外の色の旗を取り合い、自分の組の色の旗を取られると、その組はソコで敗北となる。
順位は、敗北した組から6位、5位、4位……と割り振られていき、最後まで残ると一位である。
旗を取る手段や守る手段は完全に自由である、つまり戦闘も認められている。

【ピンポンパンポーン、放送部です、参加取り消しについての受付は終了しました、これを以って競技を始めさせて頂きます】

【では、国一高校の最終競技【旗取り合戦】スタートです！】

パンパンパンツと空砲が鳴り響き、六色の戦士達が一斉に走り出した。

我が赤組の戦力配置は、【本陣防衛】と【特攻部隊】が2つで形勢されていた。

・本陣には【2、3年の先輩の方々全員】と全体指令役として【委員長】

・特攻部隊1は【心太と長谷川先輩】の男子サッカー部コンビである。

・特攻部隊2は【俺と凜】が担っている。

部隊1は、右方に進んでいき青の旗を狙っているので、俺達は左方から黄の旗を狙いにかかる。

「本陣緊急事態です！至急帰還、そして本陣の防衛にあたってください！」

委員長が珍しく大声をあげて指揮を執っている。

……それにしても本陣が緊急事態？

特攻部隊4人を除く全員を残してくるという守備的配置だった筈だが？

チラリと後ろを振り返ると赤の旗に群がる沢山の戦士達……。
チツ、ぬかったか！我等赤組が得点上トップにあったことで、他の色全てからの集中砲火を受けていた。

「……………っ！！……………翔！僕が戻るよ」

凜は急激に身を翻し本陣へ向かおうとしている。

だが、親友の声色や顔色が悪いような気がするが……………気のせいかな？

「おい、凜！お前なんかおかし——」

俺は言おうとして途中で言葉を呑んだ。

凜の「いいから、早く攻めにいけ」的な眼光をもろに受けたからだ。

「分かった、無理するんじゃないぞ？」

凜はコクリと頷き本陣まで脱兎の如く戻っていった。

そして俺は、嫌な予感を振り払い、そのまま単独で特攻をしかけにいった。

そのまま黄色の旗のもと近くまでスピードを下げる事なく突進していく。

赤への集中攻撃に、ほとんどの戦力を裂いている黄色本陣には3名程度しかいなかった。

俺はそのまま、突進を続け——

「うわっ！ぶつかる！」

「臆すな！向こうは単独だ3人で止めにかかれ！」

との黄組の連中の声を聞きつつ、衝突目前で方向を急転換し横をすり抜けていく。

そのまま俺は、3人を突き放しグングンスピードを上げ――
そして、黄色の旗を引き抜いた！！！！

第21主義「旗取り合戦 前編」（後書き）

残っている色

- ・ 赤（主人公達のクラス、得点の都合により狙われている）
- ・ 青（赤への集中攻撃中、赤の特攻部隊1に狙われている）
- ・ 緑（赤への集中攻撃中）
- ・ 黒（赤への集中攻撃中）
- ・ 白（赤への集中攻撃中）

敗北した色

- ・ 黄（赤への集中攻撃により手薄な所、翔の単独攻撃によりリタイア！6位確定）

第22主義「旗取り合戦 後編」

現在の所、俺に旗を奪われた黄色組と

心太&長谷川先輩コンビの見事なコンビネーションで旗を奪われた白組と緑組はリタイアである。

そして、驚くべき事に我が赤組の本陣は圧倒的戦力差ながら旗を奪いにくる連中を徹底的に排除していつていた。

……多分、凜が健闘しているのだろう、化け物だ！

俺は、次に黒の旗を奪いに行くべく走り始めた……が！

「本陣緊急事態です！緊急事態です！」

との、委員長の切羽詰った声を聞き足を止めて本陣へ走りだした。

……しかし、何故だろう？

黄色と白と緑がリタイアした事により、最初5色を相手してのが今や2色のはずだ。

逆に少し余裕が出来てくるであろうこのタイミングで緊急事態とは？

……いや、考えても仕方ないか、とにかく本陣への援護へ向かうだけだ。

俺は本陣へ群がる他色の生徒を片付けながら、赤旗のある密集地へと突き進んでいく。

そして戦乱の中心につき俺は――

「……………赤組は棄権します」

と実行部へ宣言した。

この瞬間、赤組は旗取り合戦3位が確定した。

俺があの時見た光景は、足首を真っ赤に張れさせて蹲まっている凧の姿だった。

競技の始め頃、凧が援護に向かうとき無理やり方向転換をして足を捻っていたそうだ。

その時は軽度の捻挫であったが、その後の5色からの防衛で足首に余計負担をかけ続け最後には動けない程に張れてしまっていた。

その光景を見た後、俺は赤組の棄権を宣言して凧を医療用テントへ運んでいった。

そして今に至る――

「……ご、ごめんね」

「無理するなって言っただろ？」

「……ごめん、僕のせいで本当に……」

「凧のせいで旗取り合戦は3位になっちまったな」

「……ごめん、僕が……僕がいなければ……」

「凜がいなければ6位だったな、凜のせいで3位じゃないか」

「…え？」

「あの集中攻撃をさばけるのは凜くらいしかいないだろ、良くやった」

ポカンと口を開けている親友を眺めつつ、俺は凜の細い足にテープングを巻いていく。

本当にコイツは、よくこんな細い足で頑張ったものだ……。そんな親友に最後に「でも無理するなって言っただろ？」と言ってデコピンをやった。

第23主義「閉会」（前書き）

【累計PV20000突破しました！】

ありがとうございます。駄作者は感謝感激雨涙です。
これからも【絶親】をよろしく願います。

第23主義「閉会」

「私立国一高等学校第30回体育祭を閉会する、生徒の諸君お疲れ様」

校長が閉会の詞を述べた。

いつも長話する校長も疲れている生徒に対して気を使ったのか、短い言葉をもつてして話を終らせたようだ。

そして結果から言えば、我が赤組は当初の目的通り総合優勝を果たした。

その際に長谷川先輩から労いの言葉が我々【1・6】に掛けられたが…………。

「え？何あの人あんな人だったっけ？」

「というか中身違うんじゃない？」

「絶対……幽霊が……乗り移りました……ね」

「御抜いよ！御抜いしなきゃ！」

「いや、今の長谷川先輩の方が望ましくないか？」

「じゃあ、ずっと憑いててもらいましようか」

「……そうしよう……！！」「……」

など、沢山のクラスメートからの驚きと疑いの声があがった。

いや……長谷川先輩は普通の時は、元々温和な先輩だったはずなんだけれどね……。

「翔！」

凜の声だ。

「ん？なんだ？どうかしたのか？」

「シンシンと話し合っていたんだけどね、打ち上げは駅前のところ
いいのかな？」

「打ち上げて…凜……怪我してるんじゃないか？」

「胃と腸は全然元気だよ」

……無茶苦茶だ。

だけど、なんか納得してしまいそうになるのは何故だろう？

「凜が大丈夫ってんだから行こうぜ！」

心太の後押し…こりや押し切られたな多分。

というか心太お前『シンシン』って言われてるけどいいのか！？

……あつ、というか打ち上げ……マズイな

「いやダメだ！安静にしてろ！打ち上げ何てもってのほかだ！」

キツパリと断言する！

「だから、大丈夫だよ？」

「い、いや、だ、だめだ！！！」

「翔、お前なんか声の調子がおかしいぜ！」

心太！！！！余計な事を気づくでない！

「何かダメな理由があるのかな？」

……………。仕方ないか。

「…………そ、そのな？少し懐が寂しいというか」

「「あー、貧乏人だったか「ね」」「」

凜と心太の声がハモった。

そつだよ俺は貧乏人さ！主に凜のせいだな！1980円を舐めるな！

「じゃあ、仕方ないね」

諦めてくれたのか…凜？

「翔の家で打ち上げをやるうか」

違かったか！っておい！！！！

何で俺の家？何でマイホーム！？

「だな、駅前行けなくなったのは翔のせいだからNA！」

なるほどー、そういうことかよコンチクショウ！！！！

「あー、もうそれでいいか…………」

「決定だね、…………あつ！ついでに——」

我が親友はクラスをぐるりと見渡し目的のものを見つけた。

「委員長さんも一緒に打ち上げ行かない？」

「え！？わ、わ、わわわ私もですか？」

落ち着け委員長！

「迷惑だったのかな？」

その親友の悲しそうな声を聞いて委員長は――

「いえ！行かせて頂きます！白瀬さんが良いと仰るなら是非とも」

ということとで委員長も打ち上げに参加する事に決まった。

第24主義「RPG？」

体育祭からの帰り道――

「松葉さん！……そ、そそそんな不純異性交遊は、私が許しませんよ？」

「翔！代わってくれYO！、即行で俺と代わってくれYO！」

いやいやいや、皆さん誤解しないで下さい！

俺こと松葉翔は紳士ですから！変態という名の紳士じゃありませんから！

現在、俺たち4人は【打ち上げ場所〃俺の家】に向かって歩いているのだが……。

……凛が怪我したので俺は凛に肩を貸している状況である。

そののどこが不純異性交遊なのだ委員長！？

いや……本音ではちよつとだけ、髪良い匂いするなとも思っただけさ！

そして心太！その発言、凛に殺される可能性があるぞ……！！

「……………シンシン？」

ほらみる心太！

般若様が地獄から再臨なさったぞ！

ゴゴゴゴとボス並……いや、ボス以上のオーラを出して般若化の

Kな親友。

「8時間位眠ってみたいのかな？それとも一生かな？」と言いつつ心太に殴りかかろうとしたが――

「……………っ！！！」

凜は呻き蹲った。

怪我してるのに無理しようとするからだ！

「…………だ、大丈夫かY O？」

「だ、ただただ大丈夫ですか？白瀬さん？」

「これくらい大丈夫だ…………ッッよ！」

いや凜！無理無理すぎるから！誤魔化し効かないから！

結局、その後大丈夫だと言い張る凜を無視して俺は再度凜に肩を貸して家まで辿りついた。

…………委員長からの罵倒を受けながら。

「母さん、家で打ち上げ、やる事になった！」

【そういうと、居間から我が母親が現れた！】

戦う

魔法

アイテム

↑

逃げる

【アイテム欄】

白瀬凜

↑

進藤心太

委員長

「おばさん、久しぶりだね」

凜はタメを発動した！

「あら凜ちゃん、久しぶりね、会いたかったわ」

母さんの好感度が50UPした！

【次の行動】

戦う

魔法

アイテム

↑

逃げる

【アイテム欄】

白瀬凜

進藤心太

↑

委員長

「おばさん、お久しぶりっす！」

心太はタメを発動した！

「……………おばさん！？」

母さんの好感度が100DOWNした！

ってか、凜も『おばさん』って言わなかったっけ！？

【次の行動】

戦う

魔法

アイテム ↑

逃げる

【アイテム欄】

白瀬凜

進藤心太

委員長 ↑

「始めまして、あの松葉さんと同じクラスで委員長をやっている——」

委員長の丁寧な自己紹介攻撃！

母さんは途中で言葉を被せた！！！！

「——委員長ちゃんね、始めまして」

委員長の精神に999ダメージ！

委員長は死んでしまった……………。

第24主義「RPG?」(後書き)

変な終り方をしてしまいました

委員長は生きているので大丈夫です……多分。

こういう形式で書いて見たかった駄作者でしたノシ

第25主義「打ち上げは泡麦茶で！」

俺らは、その後和室に向かっていった。
俺の部屋が少し掃除していなかったせいなのだが……。

始めて家に来た委員長と怪我した凜に少し興味を示していたが、母さんは普通に打ち上げの許可を出してくれた。

「この中に炭酸が苦手な奴いるか？」

一応、全員に確認をしておくが、
意味的にはあくまで委員長に対してのみになるわけだが。
凜と心太が普通に飲めるのは知っているからな！

「ん？大丈夫だよ」

「大丈夫だぜ」

「ええ、私も大丈夫ですよ」

じゃ…コーラでいいかな？…炭酸ひゃっほーい！！！！
そしてウキウキとコーラ1・5？ペットを取りに行こうとする……
が！

「あ、飲み物なら僕ココアがいいかな」

炭酸より…ココアだと！？有り得ん！信じられん！
だがな親友…家にココアは無いのだよ！
残念だったなコーラで満足しろ！

「家にココアは無いからコーラでいいな？」

「それなら、泡麦茶がいいなー」

……我等は未成年者OK？

「し、ししし白瀬さん、それはちょっと…」

委員長ナイス！流石常識人！

「打ち上げだし少し位いいんじゃないかな？ねっ委員長さん？」

ニツコリ笑って説得に掛かる親友

だがな、甘いな学校の委員長かつ最も常識人の委員長が許すわけ――

「ええ、そうですね！白瀬さんの仰るとおりです！」

へ？

頬を赤く染めて即行意見を変える委員長。

……ああアレだったね、そうだったね…。

でも、あまりに簡単に懐柔されすぎだよ委員長！

仕方なく俺は飲み物を用意しにく……はあ。

炭酸入ってればビールじゃなくてもいいじゃないかと思うのに。

冷蔵庫の所でチャチャッと『泡麦茶』を4人分用意して和室に戻っていく。

「おう！持ってきたぞ！」

「遅いよ、翔！」

凜の文句を受け流して、皆の前に『泡麦茶』を置いていく。

「じゃ、乾杯の音頭は誰がとるか？」

「俺が取るぜ！俺！俺！」

「やっぱり、やりたい人いないか……」

「俺！俺！俺！」

「んー、僕は、委員長さん何て適任だと思うけどね」

「俺！俺！俺！俺！」

「え？わ、わわわわ私ですか？」

「オーレーオレオレオレー」

「うん、お願いできるかな？」

「日本！日本！日本俺だぜ！俺だぜ日本！」

「こほん、で、ででは、私から一言——」

俺！俺！叫びまくってる、【俺俺詐欺師SINTA】を無視して、委員長の礼儀正しい音頭が述べられた。

そして『泡麦茶』を持って——

「『『『かんぱーい』』』」

「……ブフツ！これビールじゃないんじゃないかな？」

そうだぞ凜！

麦茶をチャチャッと泡立ててきたものだからな！

「『泡麦茶』を御所望だったんだろうからな」

と言って俺は、ニヤニヤ笑ってやった。

第26主義「打ち上げ——ガンナー零」

『泡麦茶』事件の後、俺等は体育祭勝利の余韻に酔いつつ、打ち上げを楽しんでいたのだが

……だがあくまで勝利の余韻に酔っただけであって、アルコール0%の筈なのだが……。

「バンバンババン！ドドドドドド！バキyun！バツキyun！」

酔ってる……もとい狂ってる馬鹿（心太）もいる訳で

奇声を発し匍匐前進をしている馬鹿をどう処分すべきか……。

「凜！委員長！人肉は燃えるゴミの日で良いと思うか？」

「んー、僕は大丈夫だと思うよー、火葬ってある位だしね」

「私は土葬の方が良ろしいかと思いますが？土に栄養が行き渡ると思いますし」

割とまともな討論になってしまった。

だが地球の為を思うなら、やはり始末すべきなのだろうか？

「そうだな、じゃあ土葬でいい——」

「——ちよつと待ってくれYOOOOO！」

煩いな心太！

今、真面目に地球の事を考えているのだ！

「進藤さん、狂った人は地球に害しか与えませんが仕方ないと思
って諦めてください」

ナイス援護射撃委員長！

というか冷静に恐いなオイ！

「俺は狂ってないYO！狂ってないYO！」

「では、何故あのような変人的行為をしたのだ？」

「ガンナーだからだぜ！」

意味不明だ…やはり処分しよう！

「ガンナーって何なのかな？」

凜！興味を持つな！酔っ払いの戯言だ！

「もしかして…ファーストパーソン・シューティングゲームの類で
しょうか？」

委員長それなに！？

「おう、その通りだぜ！通称FPSと呼ばれる類のものだYO！」

……あの…俺は全くついていけないのですが…。

その後、凜の意向で軽く説明された――

銃やら爆弾やら色々使って戦うタイプのゲームらしい。

そして心太はFPS症候群という意味不な病気にかったと豪語し

ていた。

「そうだ、翔とかもやってみないKA？」

「いや…やめとく、こんな狂った人間みたくなりたくないしな」

「僕は大丈夫だと思うけど、シンシンみたく現実と見境無くなるほど馬鹿じゃないしね」

「わ、わわわ私は、し、しししし白瀬さんがやりたいのなら…」

と、何故か今度「ガンナー」なるものを試しにやってみる事になった。

第26主義「打ち上げ——ガンナー零」(後書き)

注意

ガンナーにつきましては架空のFPSです。

ただし、駄作者はあるFPSを参考にして書くかも知れません。
案外FPSって面白いですね。

第27主義「打ち上げ——幕引き」

「……はあ……」

一つため息をつきゴミ部屋こと家の和室を見渡すと、ポテチの袋、飲み終わったペットボトル、コップ、サラ、等等が見事に散乱していた。

これは紛れも無い泥棒……コホンツ……じゃなくて打ち上げの後だった。今から約30分前に俺は凜に肩を貸して1階上にある凜の家の前まで運んでやったわけだ。

そしてそこで心太と委員長もお開きとなった。

ついでに凜の家の前で委員長が妙にそわそわしていたのを追記しておく。

「……はあ……」

俺はもう一度ため息をつき、ゴミ部屋の整理を始めた。

コップやサラは机の一箇所に纏めて、ポテチの袋やペットボトルは掻き集めゴミ箱に放り込んでいく。

ゴミ箱が一杯になりそうになった所でゴミを無理やり詰めてスペースを作る。

そのスペースに又新たなゴミを入れていく。

「愚息子よ、こりゃあ酷いねえ」

そこで我が母親から声がかかった。

「今片付けてるところだよ」

「ふうん、まあいいけどねぇ……それより今日初めて来た可愛らしいコは何だい？」

「あー、委員長のこと？」

「そうそう、あの眼鏡を掛けているモロ委員長っぽいコだよ」

あだ名とかじゃなくて本当に委員長なんだけどな…。

「あのコを狙っているのかい？」

はい？…俺そんな事言いましたっけ？マイマザー！

「ちよっ…そんなわけないだろ！」

「そうだろうねえ、愚息子は昔っから凜ちゃん一筋だからねえ」

はい？…俺そんな事言いましたっけ？マイマザー！TAKE2

「有り得ないって！というかそんなの凜が聞いたらキレるぞ多分！」

我が母は、「そうだろうねえ」とか言いつつ。

凜ちゃんはツンデレだからとかクーデレだからとか意味不明な事をのたまっていた。

個人的には凜は鬼…いや、般若デレだと思うな。

……いやいやいや、まずデレが余計な気がするな般若ツンとかか？

「ところで…愚息子よ、凜ちゃん足はどうしたんかい？」

少しだけ真面目な口調で問われた問い。

「体育祭でさ、ちょっと無理したんだよ」

「アンタが手当てしてあげたのかい？」

俺が肯定の意を示す為、コクンと首を縦に振ると――

「下手な手当てで悪化しないだろうかねえ」と言い出した、オイ失礼過ぎやしないか？

だが最後には「これでほんのすこしは借りを返せたんじゃないかい？」と言って俺の肩をポンポンと叩いて出て行った。

「借り……か」

中学生の頃を思い出してポリポリと頭を掻いた。

一体、後どれだけ借りが残っているのだろうか？

怪我の手当てなんて日常茶飯事で受けていたからな。

「……ハハハ」

少し昔を思い出し苦笑気味に笑った。

第28主義「カオス!!!」(前書き)

ループ推奨小説です。

第28主義「カオス!!!」

ピピピピ…ピピピピ…バゴオオオン!!!

「うおっ!?!」

朝から妙な爆音のせいで俺は目を覚ました。

因みに、この爆音は俺の目覚まし時計によるものだ。

【爆音式暴発時計——3050¥】

目覚めの悪い子には近所迷惑な爆音をプレゼント♪
注意事項としては、爆音に慣れてしまうと効果薄し!

ゼツシンオリジナルの架空の品物です。

キンキンと耳を攻める痛みに耐えつつ時計を見ると、6:30!俺のいつもの起床時間である。

くあつと起き上がり学校の支度をしようと思ったが……今日は体育祭の振り替え休日だった。

何となく損したような徳したようなワケノワカラナイ気分になって俺は又ベッドにダイビングをした。

今度は爆音での不快な目覚めでは無く心地よい目覚めを迎えた。
ココはやはりいつもの俺の部屋で…部屋で?…あれ?俺の部屋ってこんな広かったっけか?そして俺の部屋の地面は一面の芝だっけか?しかも長方形に線引きされていたか?これでもし、サッカーゴー

ルなんて有ったら確実にピッチだよコレ！
つてあるし！？なんで俺の部屋がピッチになってるの！？

「初めましてだぜ、俺の名前はデビッド・ベツカムだYO！」

ベツカム…？

マンチエスター・ユナイテッドの7番のユニフォームを着ている身長170程度の男が名乗った。

……あれ？何でマンチエスターの7番？古くない？身長も180以上あつた気がするんだがな。

「ところでジャパニーズボーイYO！、ここで何しているんだYO！」

いや、それは俺が知りたいって……！！

「まあいいぜ、ジャパニーズボーイ！俺の鮮やかな技を見に来たフアンの類だしNA」

ちよっ…勝手に決め付けるな！？

そしてポーンポーンを球で遊ぶ自称ベツカム様…。

上手いな…、だけどやっぱり既視感ありまくりだな…………。

うむ、これ以上引っ張っても仕方ないよな？

「フザケルのも大概にしとけよ心太！見てるコッチも恥ずかしいわ！」

スパーンと見事なツツコミをいれる俺！

頭を抱え涙目でコッチを見てくる馬鹿（心太）！

「ちっ、バレチャ仕方ないぜ！…退散だYO！」

それだけ言う自称ベツカム様は、すうーっと消えていった。
って消えるとかどういう異常現象だよ！…まあどこかに隠れただけ
だろうけどさ。

俺は馬鹿がどこに隠れたかピッチをゆっくり見回すと――

そこは既にピッチでは無かった。

暗闇の中に映える墓石が怪しげな雰囲気をかもち出している……こ
こは間違いなく墓地だった！

俺が驚いていると、そのずらつと並んだ墓の一つがガタガタを震え
出し――

ガタン！と大きな音をたてて倒れた墓石から、ゆらりとした感じで
人影が現れた。

「松葉さん、その私の墓石の名前を読んでもくれないでしょうか？」

その影は女のものだったらしく、その女の人は倒れた墓石を指指し
言った。

……名前とな？……あの…なんにも書いてないのですが？

「すみません、何も書いてないので……」

「そうですか…私には名前は無いのでしょうか？私はナナシなので
しょうか？」

悲しげに憂いを帯びた感じで尋ねてくる女は声を震わし続きを繋い
だ。

「私は、し、しししし白瀬さんに名前を呼んで貰う事は叶わない
夢なのですね？」

……わかったぞ！

暗闇で顔は見えないが、この女の人100%委員長だ！間違いない
であろう！

「というか委員長、一体何をしてるんですか？」

俺が確信を持って語りかけると

女は「わ、私は…私はどうせ委員長とかし呼ばれない存在ですよ！
と叫んで、ずらっと並んだ墓石を一斉爆破した。

…ってウオイ！委員長はそんな危険なキャラじゃない筈でしょ！？

バラバラと舞う木っ端微塵に砕かれた墓石を眺めていると、

もうもうとした粉が墓地一面に立ち上っていき、俺が目を開けたら
そこは――

破壊されつくした我が町だった。

……人類は禁断の核でも使ったのだろうか？

その町で一人だけ生き残っている人影を見つけた。

俺は、そいつに優しく手を差し出し引っぱりあげ立たした。

そいつの手は、この惨状のせいかな、傷だらけであつたが小さい手だつた。

「翔……翔は……」

そいつは、ぼそりと呟いた。

「ん？どうした？」

俺がオウム返しに聞くと――

「翔はもう死んでいる!!!」

某アニメの有名なセリフを吐いた。

つて、え？あええええええええええ！？

「あちよちよちよちよちよちよー」

あちよあちよ言いながら俺に迫ってくる。

ソイツは人間技とは思えぬ早さで拳を繰り出してくる！
北斗百。拳を完全コピー！？……化け物だ！化け物過ぎる！

……化け物？ああ……ソイツは……凜か

「親友、やめてくれ!!!」

俺が心の限り叫ぶと凜は――

「うん、いいよー」

とニツコリ微笑みやめてくれた。

単純だなオイ！というか、まずなぜ俺に北。百裂拳を繰り出してきた！？

そして親友は「僕の生涯に一片の悔いなし」と言い消えていった。

そして、今度は何故か電子音が聞こえ始め――

ピピピピ……ピピピピ……バゴオオオン！！！！

と電子音の元……つまり俺の時計が爆音を発した。ついでに辺りを見ると……俺の部屋だった。

ってか……これどんな夢だったんだよオオオオイ！？

しかし、体育祭の振り替えという事実を思い出した俺は時計を止めて、結局又ベッドにダイビングするのであった。

第28主義「カオス!!!」(後書き)

…変なものを書いてしまった駄作者です。
自分でも全く意味が分かりません(汗

第29主義「【3】を選ぼう！」

「おい、凜いるか？」

俺は今、家の上の階【506号室】の前にいる。
最も分かりやすく言えば、凜の家の前である。

ガタガタツと騒がしい音がしたのち……ガチャッと音がして凜が現れた。

凜は俺を確認するとキョトンとした顔をしていた。

「ねえ翔？今日一緒に登校する約束していたのかな？」

いや、そんな約束した覚えは確かに無いが――

「捻挫しているからな、一応迎えに来てやったってわけだ」

「それはどもありがとね」

と凜は返答して容態を述べ始めた。

振替日である昨日一応医者に行ったらしく、

医者 of 診断では軽い捻挫で歩く位は出来る状態らしいが

……激しい運動は一週間位やめるように言われているらしい。

「ところで翔は昨日何してたのかな？」

「俺か？……えっと……あつ……」

「ん？」

「いやな…寝てたというか」

「一日中寝てたのかな！？」

……まあそつだな親友よ。

それでも休んだ気は全然しなかったがな！

というか、あの夢は本当になんだったんだろう？

ん…試してみるか？

「なあ、凜って北斗。裂拳使えたりしないのか？」

「…へ？」

何か俺可哀想な人を見る目で見られているような…気のせいであつてくれ！

「翔って…もうボケたのかな？ボケ貧乏野郎！」

全然気のせいじゃないし！俺までもだから！ボケてないから！というか貧乏は余計だろ！

でもあんな夢を一日中見てる俺って……いや考えるのは止めよう悲しくなるから。

そんなこんなで登校した後は、凜が部活を出れない為に一緒に帰るという事以外は普通の日常だった。

それで一緒に帰るとなっていたのだが、
凜が何か用事があるらしく「ちょっと待ってて」と言われた。

さて……どうするか？

【1】凜との約束を破りとつと帰る。

【2】凜の用事とやらを探りにいく。

【3】適当に時間を潰す。

【1】の場合――

「死ね馬鹿が、僕との約束を破るなんていい度胸じゃないか！」

「すみません凜様！お願いしますからこの愚か者をお許し下さい！
！」

「シースルーのプリンアラモードDXを奢ってくれるのならいいかな？」

「デラックスは勘弁してくださいませ！」

「キイールウorderデラアックスウ？」

ダメだ…なんか非常にデジャブっぽいし！

そして又、野口さん2名の出費とかキツ過ぎる……！！

【2】の場合――

「……僕……待ってて言ったんじゃないのかな？」

「い、言いました！」

「なのに何でコソコソとストーカーみたいに尾行してくれちゃってるのかな？」

「凜……ちよつと後つけたくらいだし許してくれないか？」

「ん？いいよー、ちよーつと拷問させてくれるならねー」

「イギヤアアアアアアアアアア……！」

ダメ！ダメだ！バットエンド臭バリバリじゃないか！

俺……どんな拷問されるんだろう……ガクブルだなコリヤ……。

もともと【3】しか選択しが無かったのだな……。

俺は納得し、なんとなく足を屋上に向けた。

そして、屋上の扉を開くと眩い初夏らしい日差しが飛び込んできた。目が慣れたのでうつすらと目を明けるとそこには――

……凜と男子生徒の姿があった。

あ、親友は屋上に用が有ったのか……こりゃ……これじゃ【2】と同じだな……俺死亡フラグなのか？

第30主義「初夏の日差しの中で」(前書き)

ゼツシンが等々30話突破です。(第0話入れれば31話ですが汗)

読者の方々、評価感想をくれた方、投票をしてきている方、どうもありがとうございます。

これからも出来うる限り駄作を続けていこうと思います。

第30主義「初夏の日差しの中で」

本格的な夏の暑さを迎える前、春の心地よい暖かさを終えた後、そんな暑いと暖かいの中間にある気候。

日差しはサンサンとさしてきて風はゆったりと流れている。

その光景の中心を飾るのが、肩ほどの黒髪の女の子と爽やかそうな短髪の男の子。

それは全てをもつて一つの作品のような完成度を感じさせる光景である。

短髪の男の子は女の子に向かって――

「付き合ってください!」

なんの打算も無く率直な感情の吐露。

余計な形容詞などつけずにキッパリとした詞。

……青春だな、などと俺は少し親父クサイ事を考えてしまった。

そして、女の子は男の子の愚直なまでの詞を聞いて、うつすらと唇を動かした――

「只の男性には興味ありません。

この中に宇宙人未来人異世界人超能力者が居たら僕のところに来なさい。以上。」

……やっぱりなコンチクショウ。

折角の美しい青春雰囲気台無しじゃないか凜!

しかも何故にハ。ヒネタ！？

その女の子つまり凜の言葉を聞いた男子生徒は「へ？」って感じの表情を浮かべていた。

だが、君（男子生徒）は運がいいぞ！

前に見かけたときの凜は――

「ホモキモイよ！」

と言って断っていたからな。

女子に告白した筈の男子はそのせいでホモ疑惑が一ヶ月位続いらしいしな。

そんな男子生徒を無視して颯爽とした感じで凜は屋上を後にしようとして……ヤバ！

俺とはち合っちゃうじゃないか！死亡フラグを回避しなくては！

……どうすればいいんだ？

「ねえ、翔……なに勝手にストーキングしてるのかな？」

答えの無い問題を考えてる内に凜は既に俺の前に居た。

「いやな、暇つぶしをしようと来たら偶々な」

「ふーん、偶々でくわしちゃったから、気づかれないように見てたっていうことなのかな？」

……否定しようがないな……それが事実だし。

俺が黙ってるのを肯定を受けたのか凜はニッコリ笑って――

「拷問orderデラックス」

と俺に尋ねてきた。

ああ…拷問か諭吉2名の殉職か好きな方選んでいいわけね。
嬉しくないぞコンチクショウ!!!

俺は家につくとボフッと布団にダイビングした。

結局、凜の理不尽な要求は、自販機のお汁粉缶でなんとか回避したわけだ。

そこで俺のポケットがブブブと震えた。マナー設定にした俺の携帯である。

From 馬鹿

<よつ、翔！今、暇だよNA！

前に話したガンナーのお誘いだYO！

http://gannna.jp/

→のアドレスからいける無料ゲームだからこいYO！

ルーム67にて待つてるぜ！ end

心太からのメールか、登録を馬鹿にしている事は説明する必要も無いであろう。

暇だと断定されたところにはイラッとするが実際暇だしやってみるか。

第30主義「初夏の日差しの中で」(後書き)

ガンナーのアドレスも架空のもです。

第31主義「ガンナー」

【<http://gannna.jp/>】
カタカタカタツとアドレスを入力し――

ガンナーのHPが表示された。

その中の新規登録をクリックして登録ページを表示する。

ニックネーム【
】

パスワード【
】

ふむ、ニックネームか……炭酸万歳……でいいか。

ニックネーム【炭酸万歳
】

パスワード【
】

それからダウンロードをして――
完了後ダウンロードしたファイルをクリックしてログイン画面を表示させた。

ニックネーム【炭酸万歳
】

パスワード【
】

再度、カタカタツとニックネームとパスワードの入力を済まして。
ログインをする……画面に複数のルーム名が書かれていた。その
中で60番台の画面を探していく。

【61番ルーム『栄光クラン内戦』】

【64番ルーム『弱者歓迎!』】

【66番ルーム『初期武器のみ』】

【67番ルーム『国一高校1年の松葉翔君待ちノノ』】

【69番ルーム『中級クラン、アニンのメンバー募集』】

もしかして――

【67番ルーム『国一高校1年の松葉翔君待ちノノ』】
ここ…だよな……一応入るか。

【ナナシOTL>こんばんわ】

【北斗の剣>こんばんわ】

【ベツカム>こんばんわ】

俺がルームに入ると三つのメッセージが表示された。

【炭酸万歳>心太に凜に委員長か？】

俺は念の為に本人確認を試してみた。

【ナナシOTL>はい、そうですよ】

【北斗の剣>うん、僕だよー】

【ベツカム>進藤心太だぜ！】

ベツカム〓心太のようだ。

後は多分だが――

【炭酸万歳>北斗の剣は凜か？】

【北斗の剣>え？なんで分かったのかな？】

【炭酸万歳>『僕』という一人称を使うのは、この中では凜くらいだからな】

北斗の剣〓凜のようだ。

消去法だと、ナナシOTL〓委員長だろうな。

【炭酸万歳>委員長は何故にナナシOTLというニックネームにしたのだ？】

【ナナシOTL>名前の由来でしょうか、それは…名無しだからですOTL】

聞くべきでは無かった質問だったか。

…なんというかすまん、委員長。

その後、委員長ニックネームの由来の話からルーム内で軽い自己紹介が行われた。

【炭酸万歳>炭酸が溜まらなく好きなので、この名前をつけた松葉翔だ。】

【北斗の剣>翔に今日、北。百裂拳とか意味不明なことを言われて頭に残っていたからこの名前をつけた白瀬凜だよ。……因みに剣は誤字だよ】

由来は俺かい！

というかケンシロウは拳で戦ってたよね！？……いや誤字ってのは分かったけどさ。

【ベッカム>俺とイメージがピッタリだから、この名前をつけた進藤心太だYO！】

馬鹿（心太）とイングランドの貴公子のベッカム様じゃ全然イメージ違うだろ！？

名誉棄損で訴えられないだろうか…？

第32主義「ガンナー ニ」(前書き)

炭酸万歳〓松葉翔

北斗の拳〓白瀬凜

ベツカム〓進藤心太

ナナシ〇トル〓委員長

第32主義「ガンナー 二」

ルーム内で粗方の雑談を終えた後――

【ベツカム>ところで兵科は何にするか決めたのかY O?】

と心太が聞いてきた。

クエスチョンマークを浮かべる俺等に対して心太は――

兵科とは、RPGでいうところの職業みたく得手不手あるものだと説明を始めた。

- ・突撃兵【爆弾を用いて敵軍を荒らす、主な戦闘要因。】
- ・狙撃兵【狙撃銃を用いて遠距離を攻撃出来る、接近戦に弱い。】
- ・砲兵 【重火器を用いて重い一撃を打ち込む、隙が大きい。】
- ・衛生兵【唯一の回復手段を用いて後方支援が可能、戦闘能力はオ
ールマイティ。】

要約すると、こういうことらしい。

因みに心太は砲兵を選択したとのことだった。

【ナナシO T L>私は狙撃兵を所望致します】

【北斗の拳>僕は突撃兵がいいかな?】

ふむ、では俺は衛生兵にしようか?

画面の中には緑の世界が広がっていた。

所々木々があり地面には草が茂っているだけである。

ココは教習用の練習地区【grassy plain（草原）】。

あの後、凡その操作説明を受けて練習をする事なっただけだ。

【ベッカムくんじゃ、適当に打ち合ってみなYO！】

心太は、俺等初心者同士をまず慣れさせようという魂胆なのか？

俺は銃の標準を凜に定め放ち始めた……が！

打ったび打ったび、標準がアッチコッチにずれていき目も当てられない状態だった。

その間に凜に反撃され、俺は死んでしまった。ところで凜も初めてだった筈だったよな？

………なんで凜の標準はずれないのだろうか？

その後も、凜に練習と名づけられただけの一方的虐殺を味わった。ところで委員長はというと――

パーンッ！パーンッ！パーンッ！

と俺を何度も殺してくれたのだが…委員長の所在は掴めなかった。多分スコープ機能を使って遠くから狙撃しているのだろうと辺りを眺めるものの、

これだけ見通しの良い【grassy plain】のマップでも見つけれなかった。

実際のところ委員長が居たのは、俺のすぐ近くで伏せているだけで

あつたのだが

……遠くばかり探していた為全然気が付かなかったではないか！

チュンチュンと小鳥の囀りが聞こえてくる。

そして、気持ちの良い日差しと鼻腔を擦る料理の匂い。
なんとも気持ちの悪い朝である！

……なぜかと言えば昨日、俺らは不覚ながらも【ガンナー】に嵌ってしまつて

解散したのが三時半（夜的な意味で）になつてしまつたからである。
結局のところ俺が何を言いたいのかと言つと――

「眠い」

それだけである。

昨日は楽しかったのだが……少しだけ今日の辛い生活を予想して後悔した。

第32主義「ガンナー 二」（後書き）

更新滞っていてすみませんでした（汗）。

私用は、もう少しで終わりそうな状況です。

ガンナーシリーズは結構書くの難しいですね。

設定などの説明が多い上にゲームの中で対話するなど
今まで書いた事が無かったものですから。

それでも一応ガンナーシリーズも続けてはいきますが。

適当な駄作者ですみませんが、

出来ればこれからよろしくお願いします。

【番外編】第X主義「人形と親友」（前書き）

【読み飛ばし全然okです】

本編にはまだ関係の無い過去のお話です。

翔と凜の中学校での入学式直前の様子を描きました。
話の性質上、完全なシリ阿斯モードでお届けします。

それと、この話はプロットによってはキーとなる話ですので、削除や移転や本編に盛り込みや編集等の事は起こりえますのでご了承下さい。

【番外編】第X主義「人形と親友」

冬が終わりを告げ、季節は春を迎えた。

桜がひらひらと舞う中、新人生は期待で顔を綻ばせているものや不安で表情をカチコチにしているものがある。

それに反して俺は戸惑いの表情を浮かべていた……その原因は目の前の少女である。

彼女の名前は白瀬凜といい、俺の小学生時代からの幼馴染であった。

「どうした？」

と一応尋ねてみるが実のところ大方の理由は想像出来ていた。

「……………」

俺の問いに彼女は答えずに縮こまるだけであった。

そうしていると彼女は小学生程度にしか見えなかった。否、今年の春までは確かに小学生であった。

しかし、今の憂いさえ感じさせる雰囲気は既に大人かと見紛うほどであった。

あるいは芸術の域にまで達した完璧なお人形さん。

ただし、一般的に見れば至高の美しさと言えるその表情は俺からしい見れば虚構のものにしか感じられなかった。

……元気に騒いでいるのが本当の彼女なのだから。

彼女が虚構と化している理由――

それは社会からは理解されることが無いもの。本人以外にとっては普通なもの。

我俤にすら思われるもの。異質から生まれた異質なもの。

……もつとも分かりやすく表す表現ならば”彼女”か”彼”であり”彼女”とされているからである。

・俺と彼女がこれから通う高校には女子サッカー部というものがなかった。

・彼女が纏っている制服が彼女に対しての着用が義務となっていた。

別段この二点は全然不思議な事では無く、一般的な中学であれば当然の事だ。

しかし、こんな当たり前な二点だけで絶望に立たされる者も居た。

くだらない、実にくだらないと周りは思うのかもしれないが、そのくだらない二点が彼女を否定した。

男子として意地でも生きてきた意志を校則と名の鎖で縛り。

長年続けていたスポーツをする事も許されない……”彼女”だから……

”彼”なのに。

—— 一週間前 ——

『……なんで僕中学でサッカー出来ないのかな?』

—— 女子だから。 ——

『……なんで僕女子の制服着なくちゃいけないのかな?』

—— それが世の中の常識だから。 ——

『…なんで僕…女なのかな？』

—— そう、生まれたから。

『…僕は…僕は…僕は僕……だよ』

—— 社会的に見れば一人の女子でしかない。

『…何で…何で…何で？』

—— 世の中の不条理も受け入れなければいけない。

『納得…納得…納得出来ないよ！』

—— 一人で叫んでいろ、現実は何れでも流れていくが。

そこでやっと、彼女は受け入れた。

その不条理の全てを受け入れた……否、”彼女”は受け入れていなかった。

なぜならば、その時から”彼女”は”彼女”では無かった。

それは”人形”……なにも感じず考えず……そして流されるだけの人形となった。

桜の元、久しぶりに幼馴染を見た俺は衝撃を受けた。

「アイツはどこへ行ってしまったのだろうか？」それが俺がまず感じたものだった。

いや、目の前にいるのかも知れない…その希望を信じて、ゆっくりと重たい口を動かした。

「どうした？」

と、俺は震えそうになる声を必死に押さえいつも通りに――

「……………」

しかし、彼女は居なかった。

だが、なんとなく分かってはいた。彼女が居ない事も、その理由も。

「凜…俺が分かるか？」

「君の名前は松葉翔。」私”の幼馴染でサッカー仲間でしょう？」

返って来た答えは、完全な正解の上に花のような笑顔のオマケ付きであった。

だが、完全な正解であつてもソレは不正解でもあつた。

「俺は…お前なんか知らないし、そんな関係であつた覚えも無いな」

それが俺の本音である。

冷たく打ち付けた痛み（ことば）は俺の心を鋭利な刃物で抉るより痛かった。

自分で言つた言葉で自分がこつも傷つくのにそれなのに――

「そう…ごめんなさい、”私”の勘違いだったようね」

人形には、掠り傷一つ付く事は無かつた。

悲しかった。自分から言った言葉なのに、”人形”に返されただけなのに。

俺は、その悲しさを冷静に対処する術をその時は幼な過ぎて知らなかったのかも知れない。

俺は人形を抱きしめた。

抱きしめて…思いを全てぶつけてしまった。

「お前は俺の友達だ」

「そうね」

「だけど、お前は俺の友達じゃない」

「そうなの」

「なんでそうなった？」

「そうとは何を指すの？」

「お前は…もつと感情的だったはずだ」

「この方が社会に適応出来るものなのよ」

「人形が人間社会に居るのは歪なものだぞ」

「そうかも知れないわね、でも………」僕”は社会に認められない存在だから」

ここにきて、ようやく”白瀬凜”に会えた気がした。人形の隙間か

ら現れた本音。

俺は…ここでやっと”人形”に対してではなく、凜に言葉を投げかける。

「……俺は、お前が男でも女でも関係無い、
一人の存在”白瀬凜”としてお前を認めている…それじゃ駄目か？」

「……一人の存在として？」

不安げに揺らめく瞳。

完璧であつた人形は崩れて只の人間となつた。
だが、俺は人間の方が美しく感じた。

「ああ、一人の存在として」

俺は、凜を抱きしめる力を強くした。……安心させるように。又、
俺が安心したい為に。

それが白瀬凜という存在が俺にとって親友になつた瞬間であつた。

【番外編】第X主義「人形と親友」（後書き）

次回からは普通の【ぜつしん】をお届けします。

第33主義「四人パンダ」

教室の片隅で一つの机を囲んでいる四人組みがいる。

四人とも目の周りが真っ黒に変色していて怪しい雰囲気立ち昇っている。

その四人組はパンダ愛好同盟でも無ければ、変な宗教団体でも無かった。

「くくくあつ」「くくく」

四人が同時に声をあげた。

これも又、儀式的でもなんでも無い……ぶっちゃけ只の欠伸だった。四人とは、俺こと松葉翔と凜と心太と委員長であった。

昨日、皆でガンナーをやっていたせいで寝不足なのである。

「今日は何時からガンナーに集まるのかな？」

「帰ったらすぐはどうだYO！」

「ふむ、別に俺はそれで構わないが？」

「……あの……その……えーと？……」

皆で予定を決めていたところ委員長がおかしな言葉を呟きだした。

「ん？どうした委員長？」

「あの……なんと言ったのでしょうか？何か重要な事を忘れてる気がするのですが？」

「重要な事？」

「はい……えーと、その——」

そこで委員長の言葉は遮られた。

「——朝のホームルーム始めっぞー、席つけー」

我等がグレイトティーチャー藤森に。

藤森は教室を一瞥し、皆が席に着いたことを確認した。

「連絡事項だが、三日後から期末テストだ！」

ふむ、三日後から期末テストかなるほど………って！

「何で三日前に公表してるんだYO！」

俺の心の叫びを心太が見事に代弁していた。
そうだぞ藤森め！遅い遅すぎるではないか！

「なんでってそりゃー言い忘れてただけだが？」

完全開き直りですか！？

「…あの藤森先生、一応いつ頃から忘れてらしたのでしょいか？」

委員長が丁寧に話しかけるも、藤森は相も変わらず飄々としていた。

「二週間前くらいだがな、大丈夫だ委員長お前は頭がいいから問題

ないな！」

「ちょっと待てＹＯＯＯ！俺は俺はどうすればいいんだＹＯ！」

「ん？進藤、一年くらいは留年出来るから安心していいぞ！」

心太がそれを聞いて顔を真っ青にした。

そして心太は――

「横暴だＹＯ！横暴だＹＯ！、期末テストの延期を求めろぜ！」

思いつきり抗議を始めた。

その心太を皮切りに他のクラスメートも騒ぎ出した。

「教育委員会に訴えるぞ！」

「問題文盗むぞ！」

「ルッパァーン参上！」

「サボリ教師め！」

「というかテスト自体いらないよね」

おい凜！

「範囲１ページが妥当な所だぞ」

「職権乱用反対！」

「食券乱用変態！」

そんな批判を受けている真っ最中の藤森はというと、

途中で口を挟んだ凜以外の抗議メンバーを睨みつけた、ビバ差別！。だが、その睨みに退く生徒達では無かった……本当にテスト切羽詰ってるのね。

「に、睨んでも恐くないぞ、ルパン乱用食券参上変態教師め！非が

あるのはそつちだ！」

ルパン乱用食券参上変態教師！？

……抗議内容より、この造語のが気になるわ！

だが、藤森は、未だに飄々としていて決定的な一言を放った――

「とういかなテストの日なんてのは年間予定表に乗っていたんだがな、文句あつか？」

その言葉を聞いた途端、教室が凍りついた。

抗議をしていた連中はいきなり口をつぐんでしまった。

凍りついた教室の中で我等が担任藤森はというと

凜と委員長だけに「テスト応援しているからガンバレな！」とだけ告げて教室を出て行った。

相も変らずのフリーダム教師であった。

第34主義「役職名とあだ名」

6 時間目授業【国語】

ガラガラガラツと音がして教室の扉が開いて担任藤森が教室に入ってきた。

今日は、テスト3日前と知らされたせいかクラスの連中全員がマジメに授業を受けていた。

あの心太でさえが、飯を食った後の魔の5時間目を耐え抜いたわけである。

「席つけー、授業始めっぞー」

藤森が着席を確認した後、点呼を済ませて授業を開始した。

「教科書63ページを開け！、えっと――」

「安藤の次だから、えーと」とかブツクサ言っていた藤森は、頭をポリポリと掻き「【あ】の次だから【い】だっけな」と勝手に自己完結し言葉を続けた。

「委員長、教科書を読んでくれ！」

「あの…それは宜しいのですが……」

「ん？どうした委員長？」

「委員長とは役職名であって、名簿に載っている私の名前では無いのですが……」

「……あのな悪いのだが、名簿にも委員長で載せられているわけだ何故かな。」

え？ちよっ……何この学校！？

「そうですね、分かりました、ページ63で宜しいのですね？」

え！？…委員長それで納得しちゃっていいの！？

「千里に旅立て、路糧を包まず。「三更月下無何に入」と云けむ昔の人の杖にすがりて、

貞亨甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の声そぞろ寒気也。」

スラスラと【野ざらし紀行】を読み上げる委員長。

凄いな…漢字の読みとかでつかえないところが特に。

「よし、委員長良くやった席に着け、次は作者を「い」の次だから――」

という藤森のセリフを制して、我が親友が「はい！」と手を上げた。

「ん？どうした白瀬？」

「僕が答えたいです」

「おっ、自主性が合っていていいな白瀬！成績5だ5！」

5取るの軽……！

最高評価を1回の発言で認めちゃっていいわけ！？

それにしても凜が自ら手を挙げるなんて珍しいな
…なんて思ってた凜を見ると、自ら手を挙げたわりには、難しい顔を
していた。…はて？
そして、一瞬…ほんの一瞬だけだがニヤリとあくどい笑みを浮か
べた。

「ま…まつ…まつばしろう松葉翔です！」

へ？俺【野ざらし紀行】書いたっけ？…絶対無ーよ。

「あつ…まつおはしろう間違えました、松尾芭蕉です……」

と訂正して、恥じた顔をしている凜。

【まつば・しろう】と【まつお・ばしろう】を間違えたってわけか？
…いや、違うな、絶対わざとだと思う。

その後の事を語ると…俺は何故かクラスメートに芭蕉というあだ名
で呼ばれ始めてしまった。
勿論それについて凜を攻めたてたが――

「ごめんね、芭蕉…じゃなくて翔、わ・ざ・と、じゃなかったんだ
よねー」

だそうだ。
うむ、分かっているぞ親友、絶対つつつつ対にわざとだってことは
な！…！

第35主義「勉強合宿——計画編」(前書き)

累計PV40000突破！

累計ユニ10000突破！

駄作者的には驚きのアクセス数にびっくりです！？
皆様ありがとうございます、そしてこれからもヨロシクお願いしま
す。

第35主義「勉強合宿——計画編」

朝：俺が学校に到着すると——

「助けてくれYOOOOOOO!!！」

心太がいきなり叫びながら近づいてきた。

まず、うるさかったので拳骨を一発おみまいしておいた。

「痛てえYO！」

「いや、朝っぱらからうるさいから、ついな」

「翔てめえ、つい、じゃなく——」

「——で？何を助けて欲しかったのだ？」

心太のうるさい抗議を聞くのも面倒なので話を逸らしてみた。

効果はバツチりだったらしく、心太は真剣な表情をして話し始めた

…似合わない!!？

「ほら、もうテストまで後2日しかないからNA！俺ヤバイぜ！」

あー、この馬鹿はサッカーでの【スポーツ推薦】だっけか？

確かに中間の時のコイツは哀れな点数だったしな。

——ん？よく考えれば【スポーツ推薦】って関係無いんじゃないか？俺のよく知っている化け物的な親友も【スポーツ推薦】で入ったけどテスト悪くなかった気がするが？

ま、それは一先ず置いておいてココは心太に一言助言しなくてはな。

「心太…安心しろ」

穏やかな俺の言葉を聞いて

心太は意外そうにされど喜ばし気な表情を向けてきた。

「藤森も言ってたが、一年間は留年出来るらしいぞ」

我ながらナイスアドバイスだな、うむ。

馬鹿が二日前や三日前からテスト勉強を始めても間に合う筈が無い
しな！

「ちよっ…おい翔！それマジで言ってるわけじゃないよNA！」

ん？なんで不満気なのだ心太よ？

俺のアドバイスはベストな筈なのだが…それにな——

「そついう事を頼むなら、俺より断然適任がいるのだが？」

「誰だYO！！！」

おー、心太、本当に必死だな。

「委員長だな、委員長は多分クラス一位だったはずだが？」

「サンキュー翔、感謝するぜ！」

それだけ言つと心太は、ダダダと委員長の下に走っていった。

「助けてくれYOOOOOOO!!」

心太が委員長に声を掛けた……相変わらずうるさいものだ。

「進藤さん、どういたしましたか？」

委員長の言葉を聞いて心太は自分の状況を伝えた……が！

「進藤さん、それは自業自得というものです、

勉強とは——日頃の——ということにして——授業

——予習の大切——話を聞いて——以下略」

委員長はクドクドと丁寧に説教を始めた。

途中長くてカットしたが、それでも長すぎたので以下略でよいだろう。

「委員長、そんな事言わずに助けてくれYO！」

「駄目で——」

そこで心太と委員長の話に割り込む者がいた。

「——ん？二人でどうしたのかな？」

我が親友こと凜である。

「それがですね、聞いてくださるでしょうか？……この進藤さんが……あ」

突然委員長は言葉を止めた。

そして…天上を仰いで何かを必死に考えているようであった。

思考タイムが終り、委員長は目をキラキラとさせた。

そしてゴホンツと咳を一つして――

「進藤さんがですね、勉強合宿を私達で行おうと提案しているのですが……。」

「へ？俺…そんな事――」

心太が急いで訂正しようとしたが

委員長が眼鏡の奥の目をギラつかせ黙らせた。

オマケに口パクで【り・ゆ・う・ね・ん】と言った気がした。

「――そんな事…言った…んだ…YO！」

…ドンマイ心太。

その心太の様子に満足したであろう委員長は凜に向かって話を続けた。

「し、しししし白瀬さんは参加するつもりで、でででしょうか？」

焦ってるなー委員長。心太との対応の違いにおねーさんビックリだ！。

多分だが、委員長の目的は凜との勉強合宿だろうな…アレだしな。

「んー、面白そうだし参加しようかな」

これによって、俺達4人の一泊二日の勉強合宿が決定された。

第36主義「勉強合宿——集合編」

テスト前日の午後5時50分。我が家にて――

【ピンポーン】

と音がしたので玄関まで行きドアを開けると委員長が居た。

「こんばんわ松葉さん。この度は大変お世話になります」

キツチリ90度に腰を曲げて頭を下げている。

お世話とは、勉強合宿の事である。会場は何故か我が家…何故？

「…了解、ところで委員長、早く来たんだな」

集合時間は6時である。

「はい、10分前行動のつもりでしたが…迷惑だったでしょうか？」

「い、いや、迷惑じゃないが……というより家が会場になってる方が迷惑だ」

ボソツと本音を漏らしてみる。

「そうですか、迷惑でなかったのなら何よりです。後半は聞こえませんでしたか」

ボソツとした声で言ったせいで聞こえなかったのか？

まあ…ワザト聞こえない不利した可能性も…有り得るがな。

詳しくツツコムのも微妙なので、仕方なく俺の部屋へ連れて行つた。
…いや、連れ込んだわけじゃないからな？勉強合宿それも4人で
の予定だっただけなのだぞ！

【ピンポーン】

委員長を部屋に通して、少し時間が経つた頃、チャイムが鳴つた。
で、玄関をガチャッと開けて――

「よ、凜。時間ギリギリだな」

現在6時00分00秒である。…ある意味完璧だ。

「そうだね、でも階段を1階降りてくるだけだから間に合っちゃう
んだよね。ギリギリでも」

「まあ…そりゃそうだな。先に来る必要も無いだろうし」

「そゆことー、で皆そろつてるのかな？」

「いや…馬鹿（心太）がまだだ」

「ふーん、なるほどね。じゃ今まで委員長と部屋で二人きりだった
のかな？」

ねえ…親友様。その言い方やめてくれないか？
委員長に聞かれたら殺されそうな気がするからさ。

その後凜も部屋に連れて行った。

…両手に花とはこのことか？棘だらけだな。

【ピンポン】

三度目のチャイムが鳴った。

相手は分かっているから、そのままガチャッとドアを開け――

ボタンと即行で閉めた。

「痛つてえYO!」

見事にドアにサンドイッチされた馬鹿が居た……計画通り!

「心太、遅刻だぞ!」

現在6時05分である。

「ああ、悪い悪い…俺が悪かったぜ」

グッグッグッ。

「そうか、分かってくれているなら何よりだ」

グッグッグッ。

「悪かったからさ… ドアで挟むのやめてくれYO！、それにさ今も力加えてるだRO？ 痛ええYOOOOO！」

「チッ」

俺は舌打ちをしつつも、心太をドアでグッグッグッと押すのを止めた。

その後、ドアに挟まれた時の赤い痕をつけた心太を部屋に連行し始めた。

第37主義「勉強合宿——パンドラの箱編」

「し、白瀬さん……ダメ……です」

「もっと、そこを……そうして……イイ……イイです!」

「委員長さん……コレ……で本当に……イイのかな?」

「自信を持って下さい白瀬さん!……本当に初めて……とは思えない程なのですから……」

「ねえ……委員長さん。デキちゃったよ」

「……そう……ですか。流石、白瀬さんです……」

………松葉翔です。

遅れてきた馬鹿を部屋に連行しようとした迄は良かったのだが。部屋に入る前……扉からなんとも言えない委員長と凜の声が聞こえるのはどういふことであろう?

「どうしたんだYO!翔。部屋に入らないのKA?」

ああ……馬鹿はいいな。

なんにも考えなくて良いのだから。

「心太……パンドラの箱は開けないほうがいいぞ」

心からの忠告である。

でも…流石にマジで委員長が…それに凜も…。
いや凜は心は男性だし、委員長はアレだし、仕方ないことなのか？
それにしても…俺の家で……それにデキちゃったって……ん？どう
やって？

【ガチャッ】

俺が内心の葛藤も知らずに心太は、ついにパンドラの箱を開けてしまった。

…ああ、これからの展開どうしよう？…まず目を瞑るか？

「凜…お、俺は何も見て無いからな！」

「…「は！？」「」」

全員の声が重なった。

……なんかオカシイなと思いつつ目を開けてみるとそこには――

ごく一般の風景が合った。

詳しく言うならば、心太は扉を開けて中に入っただけだし、
委員長は凜に先に勉強を教えていたようだ…ややこしい会話をしお
つて！

「ふう…なんだ…早とちりであつたか。良かった良かった」

「ねえ…翔？狂ったのかな？いきなり目は瞑るし、顔は真っ赤だし。」

「い、いや…何でもないぞ！何でも！」

事実がこうであつた以上、

俺の考えは只の妄想でしかない…気づかれたら俺は生きていける自信が無いな。

俺って……ムツツリじゃないよな？な！？

「何か声の調子がおかしいぜ！翔」

余計な事に気づくでない心太！

「…松葉さん？いかがなされました？症状からしますと風邪…いえ、精神障害！」

違うから！違うから委員長！

その後…なんとか、この場を宥めて勉強を始めようと提案した。
そう……なんとか土下座をしながらね。

第38主義「勉強合宿——勉強編」

俺の部屋にカリカリと筆を走らす音が響く。

机の上には、筆箱やワークや教科書や洗濯バサミが置いてある。

洗濯バサミはというと、眠ったら罰ゲームとしてつけられると
事だ…by某親友。

「ここの方程式分らないぜ！」

「んー、面倒だから丸暗記でいいんじゃないかな？」

「分かったYO！」

凜が心太に微妙なアドバイスを与えたり。

「ちつ…範囲広いじゃないか、藤森め……」

「あの松葉さん？そこは出る箇所が決まっておりますので、そこだけ抑えれば宜しいかと」

「そうだったのか？……聞いた覚えは無いぞ？」

「僕はあるけどねー」

「…俺もないぜ！」

「多分…俺の予想だが、委員長と凜以外、知らない情報であろうな」

「そりゃ差別だYO！」

「今更じゃないだろ？…諦める心太」

藤森の新たな差別が判明したり。

「あれ？この解き方どこが違ったのかな？」

「白瀬さん！わ、わわわ私で良ければ…じっくりとお教えします
が？」

「うん、ヨロシクね、委員長さん」

「は、はい！…えっと、その±が違いますね…それ以外は宜しい
かと」

「ありがとね」

「いえいえ、それにしても大学入試レベルの応用問題を良く理解し
ていましたね？」

「最初、教えてくれた問題の応用でしょ？ちよつと考え方変えれば
いいだけだしね」

「……流石、私のヨ…ごほんっ、なんでも御座いません」

凜が委員長に習ったり、委員長が嫁宣言を危うくしかけたり。

意外と中々、はかどっている勉強合宿であつた。

そして時計を見るといつの間にか二時間以上も経っていた。

20:30を過ぎた時、俺の部屋の扉が開いて――

「中々…ちゃんとやってる様じゃないかい」

援護物資隊…いや、我が母親が差し入れのサンドイッチを持って現れた。

「んじゃ、これでも食らってもう少し頑張るんだねえ」

そして我が母親は、差し入れを置いて部屋から出て行った。
さて…飯でも食ってから後半戦頑張ろうか！

第39主義「勉強合宿——天災編」(前書き)

最近スランプ気味です(汗

第39主義「勉強合宿——天災編」

サンドイッチを食べ終えたわけだが…

腹が膨れると、なんていうか眠くなるわけだ！

そこに文字と数字の羅列を見ていると催眠術に掛かったような…ふあゝ。

「おゝい…翔？…5、4、3、2、」

凜の声？

……………！！？

「ふあい！」

危ない！危ない！

俺が夢の世界へレッツラゴーする一歩手前で助かった。

目がようやく現実世界に戻ってくると――

指を二本だけ突き出した親友の姿があった。

「チツ、起きたかー」

親友は、洗濯バサミをギッシャンギッシャンと動かしながら舌打ちをした。

寝たら洗濯バサミをつけられるという罰ゲームを執行しようとしていたようだ。

本当に危なかった！

洗濯バサミごとときと舐めては痛い目をみる…そのままの意味で！

『俺は天才だぜ！……むにやむにや』

と、有り得ない夢を見ながら馬鹿が眠っていた時のこと――

『心太！……5 / 4 / 3 / 2 / 1 / 0』

親友は五本の指を折り終わってニツコリと微笑んだ。

そして洗濯バサミを一つ取り…馬鹿の唇（その中でも薄い部分）にバチンとつけた。

『ぎゃああああ、痛えYO！』

心太が飛び起きた！

洗濯バサミとかをさ、頬につける位なら痛くも無いものだが…狙うところによつては痛いんだよな…異常に。

『アレ！？、俺の1000点のテストとラブレターの束は何処だYO！』

なんとも都合の良い夢をみていたようだ。

『アレ？ここは？翔の家？……ああ、夢だったのかYO！』

やっと完璧に目が覚めた馬鹿は、自分の唇についている洗濯バサミに気づいて外した。

……が！、又バチンと洗濯バサミがつけられた…勿論、親友の手によつて。

『ぎゃあああ、痛えYO！』

というわけである。

その後、俺は台所に行ってコーヒを持ってきた。
そのまま、朝までコーヒの湯気と口に広がる苦味を伴いつつ勉強を続けた。

朝。

「んじゃ、今日のテストが終わったらぐっすり眠れるから頑張ろうかな？」

「「「サー、イエッサー！！！」」」

「僕達なら、テストなんて恐くないよ！」

「「「サー、イエッサー！！！」」」

「さあ、来いテスト！僕達は無敵だ！」

「「「サー、イエッサー！！！」」」

「僕達は何なのかな？」

「「「天才！天才！天災！！！」」」

「違う！僕達は超天災だよ！！！」

「「「サー、イエッサー！！！！」」」

「よし、出陣だよ！！！」

「「「サー、イエッサー！！！！」」」

寝不足により朝っぱらから妙にハイテンションな集団と化した。

所詮一夜漬けだ？

そんなもん知ったことか！

凜大佐も言ってたであろう？我等は天才…もとい天災だ！

第40主義「恐ろしい」(前書き)

すみません、大スランプでした。

6 回程度書いたのですが上手く行かなく今頃になってやっと完了。

その間に駄作者の作品の今までとそして今の作品の出来の悪さに恥ずかしくて死にそうでしたが、読んで頂いている方がいるので一応執筆は続けていきます。

・・・駄作ですみません><

第40主義「恐ろしい」

今、俺は駅前を歩いている…。
テスト後のリフレッシュをするとの目的で凜に連れられてブラブラと出歩いている訳だ。

テスト返却までは、採点の都合上で数日から一週間程度の期間があるものだ。

その期間が地獄を迎える前のアルカディアと感じている生徒も多数存在する。

ま、俺はある程度の感触は得ているので赤の魔手にかかる事はないであろう。

……特に国語は自信がある、委員長と凜がもたらした情報そのままに問題が出たのである。

流石に依怙贖の藤森とはいえ、やり過ぎな気もするがな。

なんとなくでブラブラと彷徨っていて時間は1:25となっていた。
現在は駅前通りにいるわけだし安く済ませるとなると――

「少し腹減ってきたな、マグドでも入るか？」

マグドとは、知らない人はいないであろう有名バーガーチェーン店
マグドロナルドである。

略してマツグやマグドなどといった言葉が広まっている。

マスコットキャラクターの面では、危ないピエロが踊り狂っている
という特徴もある。

「んー、僕は別にいいかな」

なら決定だ。

俺達の足は、この時になって初めて目的地というものを定めて動き出した。

――が、予想外の面倒くさい事が起きた。

「よう、そこのお嬢さん、可愛いね」

「俺達と遊ばない？」

凜が馬鹿なナンパ師二人に声をかけられてしまった。

別にこれ位どうって事は無いが、こんな駅前で暴力事件を起こすのはかったるい。

俺は凜にアイコンタクトを飛ばす。

凜はコクリと頷いて――

「いいよー、ちょっと着いて来てくれるかな？」

ところ代わって、裏通りに俺達はある。

凜の言葉に二人は、ヘラヘラと了承して着いて来てくれたわけだ。

「で、どこ行きたいのさ」

「カラオケ行こうよ。カラオケ」

ナンパ師、AとBでいいだろう、AとBが凜に話しかけている。

「ここかな？」

「「は？」」

AとBがシンクロした。

そして驚きの表情からニヤニヤとした表情に変わった。

「へへへ、お嬢さん意外と積極的なんだ」

「こんな人気の無い、裏通りに連れて来ちゃって」

…ああ、凜は積極的だな。

ただし、AとBが考えているのとは180度違う方向でだな。

「ねえ、その海老さん達？、さつさとどっか消えてくれないかな？」

ABさん？海老さん？

…なんでもいいや、深く考えずにこれからは海老さんに改名しよう。

勿論、凜の言った事に従ってくれるとは思わない。

シツコイと予想したから簡単に引っぺがす方法をふるえるように裏通りまで招待したのであるしな。

「は？海老ってなにさ」

「ってか、俺達をこんなところまで連れ出しておいて何言ってるわけ」

海老達がギャアギャア騒ぎ始めた……が！

そんな抗議の声は一瞬で沈められた。

大きな鈍い音と地震に近い振動が起きた…発生源は凜の足である。

ダンと思いつき振り下ろし、コンクリの地面に深いヒビを加えた。

「で？何か文句あったのかな？海老さん？」

素敵なデビルスマイルを浮かべる親友。

それに対して、高速で首を横に振る海老さん…おい首もげるぞ！

「それにね、僕の好きなタイプってね」

ここで言葉を切る我が親友。

「男らしい強い男とで仰るのでしょうか」

「ボクシング世界チャンピオンとかモーニングブルードラゴンとか倒せと仰るのでしょうか」

ま、普通の女性なら強い男には惹かれるかもな。

モーニングブルードラゴンを倒せるような巨漢は別として。

「女らしい可愛い子かな？」

…凜ならそうであろう。

内面は完全に俺や海老さんと同じ男であるわけだしな。

「というわけで、今からコレつけてくれないかな？」

と凜がどこか異世界からでも取り出したように、いきなり現れた箱を指し示した。

箱の中身は――

猫耳、兎耳、メイド服、浴衣、スク水、十二単、眼鏡、セー。ムー
ン衣装…etc

つまりは、男の尊厳をメッタ刺しにしても余りあるコスプレ用具で

あつた。

「それは勘弁してください」

「駄目：死にたいのかな？」

海老さんの必死な叫びに冷徹に返す親友。

その後の事は、あまりに酷かったので詳しくは語るつもりは無い。
とにかく俺達は、平和にマグドでの昼食を終えて店を出た：勿論コ
ーラは3杯頼んだ。

——で店を出るとだ。

ああ海老さん達は何て学習能力の無い事を。
今度は、偶々委員長を見つけて必死にナンパをしているところを目
撃してしまった。

「海老さんー」

凜の天使の声に振り向く海老さん。
ビクツと肩を跳ね上げて青い顔で振り向いてきた。

「それ僕の友達だから手引いてくれないかな？」

「えゝ、ちょっと困るしゝ」

「邪魔するってなら、その友達とやら痛い目あっちゃうよ」

海老さんの学習能力ゼロ確定！

でも、下手に手は出せない凜はどうするかといえば。

ポケットから携帯を取り出した。

「警察に通報する気」

「そんな事したらどうするか分かってる？」

それに対してフルフルと首を横に振った凜。

オマケにその携帯を海老さんに見せ付けた…この印籠が目に入らぬ
かって感じだな。

「え？なにになにメアドとか？……うあへ！！？」

海老さんの調子の良いナンパ口調が途中で途切れた。

……携帯に写し出されていたのは、痛々しい男共のコスプレ姿の写
真。

「よし、これを今からチェンメでばら撒いちゃおうかな？」

海老さん達は必死に謝りながら逃げていった…恐ろしい。

委員長は助けてくれた凜をウツトリと眺めている…恐ろしい。

家に帰った後、凜から添付付きで送られてきたメール。

F r o m 親友

<このメールは呪われたメールです。
受け取ったら、5人に回さないと責方もこの人達を同じ目にあわせ
ます。

添付画像——男共のコスプレ姿の写真。 e n d

白瀬凜：問答無用で恐ろしい。

第41主義「うほっ？」（前書き）

最近、投稿まで日が開きすぎています駄作者です。

……最近アイデアが浮かんでも作れないんですよ（汗）

第41主義「うほっ？」

俺は学校の正門から伸びる道を歩いている。

偶には一人で、のんびりと歩くのも良い物だ。

少しづつ季候が夏へと変わっていつているので、いまだ日差しが降り注いでいる。

ちよつと暑い気もするが、これはこれで心地よいものだろう。

歩いていくと直角に二方向に分かれている道に辿りついた。

——それを見て何となく将来の事を考えてしまうのは高校生として必然なのだろうか？

しかし……俺は将来何をしたいのだろう？

結局のところ考えは纏まらず、まだ一年だからという理由で先延ばしにした。

「「イデッ！！？」」

頭が痛みで熱い……多分何かにぶつかったのだろう。

ゴツンと音がしたのだから間違いは無いのだろうか。

これが朝で、ぶつかった相手がパンを啜えた女の子だったりするとフラグが立ったのだろう。

しかし、夕方でぶつかった相手が筋肉質の男となると……フラグが立つても非常に困る

「うほっイイ男」とか言われたらどうしようか！？

いや……俺は背が高くも無いしイイ男じゃないから大丈夫だよな？
だが、もしもの時は走って逃げれば良い、足には自信があるからな
！！

俺は一応「すみません」と言っで、とつとと退散しようとした――が！

「おい、ちょっと待てや」

からまれてしまった、なんか最近多いね。

「おめえは、確か……松葉翔だったな？」

名前まで知ってる！？……ストーカー！？
ぎゃあああああ！助けて！助けて！

「おめえ、オレ様と前にあつた記憶ねえか？」

いやあああああ！無理やりフラグ立てようとししないで！

俺は、パニックって急いでその場を立ち去ろうとした。

しかし、ホモヤロウに腕をつかまれ男のほうに顔向かされた。
キスフラグ？いやあああああ！！！！

「松葉、もっかい聞くぞ本当にオレ様と会つた記憶ねえか？」

いやああああ……って……あ！

かなりの上背にがっしりとした体に短く刈り込んだ髪。
コイツ見たことあるわ！

「丹波か？」

「おめえ、やつと思ひ出したのか」

丹波——強豪の西剛中のキーパーだった奴か。

でかい図体の割りに機敏な動きとキック力のある、鉄壁キーパーだ。その実力は、かなり高く多数の高校が目をつけていた程のもんだ。だが、一つだけ問題点が有り……今もそうなのか確かめてみよう。

「お前、こんなところに何しに来たんだ？」

「そりゃあ、白瀬様に殴られにきたに決まっってんだろ？」

やっぱり……ね。

昔、丹波が凜に一目惚れしたとかで会った早々告白した事があったのだ。

その時に凜に投げられた後蹴られまくったという可哀想な奴だった。……いや、その時に凜の隣に居た俺は可哀想だと思っってしまったのだ。

しかし、丹波はそれで目覚めてしまったのだ。

そして何より性質が悪いのは【凜専用のドM】だということだ。凜以外にそんな事されるようなら丹波は迷わず憤怒するだろう。

「凜なら、駅前のマグドで飯食ってるよ」

「まじか、サンキューな松葉」

それを聞いた丹波はドドドと走っていつてしまった。あの体格なのに足が速いな。

勿論俺は嘘をついた。

凜は国一高校のグラウンドで部活に勤しんでいる。

だから俺は、心太や凜と帰らずに先に一人帰宅をしているのだ。

俺の家が近づいてきた、ちょうど時計は4時を回り日が少しづつ傾き始めてきた。

俺は帰宅途中に小さい公園を見つけた。

第42主義「どろぼーのおじさん」

「すみませんっ」

小学生位の男の子がペコツと頭を下げる。

俺が公園を通り過ぎようとした時に、黒と白の球体が俺を襲ってきたわけである。

だが、ギリギリのところでその球体を腿でトラップした。

「いやゝ少年、青春しているね。ハッハッハッ」

優しい俺だからこそ笑っていられるのだ。

「あのっ……」

少年が何か言いたそうにモジモジしている。

それを優しい俺は察して――

「いやいや、気にする事では無いよ。次から気をつけたまえ」

それだけ言ってポンポンと少年の頭を軽く叩いた。

そして、颯爽とこの場を去っていく。

見事な紳士振りだ俺!!!!

「まっってください!」

少年が、夕日をバックに消える俺に話しかけてくる。

「ハッハッハッ。だから気に病むな少年」

「ちがいますっ！ぼーるをかえしてくださいっ！」

……………へ？……………あ。

今気づいたらトラップしたボールをずっと蹴りながら歩いてたよ、俺。

「かえしてくださいっ！どろぼーのおじさん！！」

え？これじゃまるで俺悪人みたいじゃないか？

何故？紳士の俺が悪人扱い？

色々と不満はあるが、少年の「どろぼー」発言の後

周りの人の空気がヤバメだったので俺はおとなしくボールを返す事にした。

「ほら、少年よ。受け取れ」

蹴っていたボールを足でフワリと浮かして少年の方に蹴った。それから俺は再度、家への帰り道を歩こうとして――

「まっってくださいっ！」

――少年の一声に止められた。

今度はなんだ！？俺はもうボールを持ってないぞ？

「どろぼーのおじさん、さっかーうまいねっ」

「そうか？ところで少年はソフトボールでもしていたのか？」

「へっ？」

少年が間の抜けた声をあげて、ずいっとさっき返したはずのボールを見せ付けてきた。

……………ああ、なるほどね。

「ボウリングか少年——イダッ!？」

俺が何か言おうとした瞬間蹴られたよ？小学生に。

「みてわからないの？さっかーだよ!」

え?……ああ、なるほど。

小学生だからボールが小さいのか、おそらく4号球を使っているの
であろう。

その後、公園のベンチにて。

「だから、河崎フリンダーレは今年J2に降格するって」

「それはないねっ、ぼくのようじゃ御宮アリディーギャがこうかくするねっ」

何故か小学生の少年とのサッカー話に花が咲いてしまった。

「ところで少年。好きなサッカー選手とかはいるのか？」

「んーっとね」

さて、海外の有名選手の名が出てくると俺は予想している。

小さいときなんてそんなものだ騒がれている選手に憧れを持つ。

しかし、予想外に抽象的な答えが帰って来た。

「なまえもしらないんだけどね。ごねんまえにねすごいせんしゅ
みたの！」

「そのひとはごねんまえにしあいだね、
ずばばつとはしつて、どごーんつとしゅーとをきめて、にっこり
とわらっていたんだよ」

………こんなので分かる人がいたら出てきて欲しいものだ。

「それは日本人か？外人か？」

「そのせんしゅはね、しょうがくせいだよ………あついまはこうこう
せいくらいかな？」

へー。

小学生のわりにミーハーな答えじゃなかったものだ。
どんな奴だかすっかり分からんがな！

「ぼくのおねーちゃんもね、そのせんしゅにあこがれていたよ」

「お前、姉がいるのか？」

「うんっ、とってもあたまいいよ。じまんのおねーちゃん」

「もうごじだ。かえらなきゃ。またね、どろぼーのおじさん」

「じゃ、またな」

少年が帰った後で、俺も公園を出る。

学校を出たときはまだ明るかったが、今は暗くなりつつあった。

第43主義「クマと神とバイト？」

「ねえ、翔。お金貸してくれないかな？」

朝学校で――

俺は凜にカツア……じゃなくて金を貸してくれと言われていた。

「……なあ、なんで必要なんだ？」

「んー、ちょっと欲しい物があつてねー」

「ふむ、幾らぐらいのものなんだ？」

「えつとねー。50000円かな？」

……50000円？いや5万円か……って！？

「5万って、何に使うつもりなんだよ！？」

「クマの〇ーさんの1/1スケールのヌイグルミかな、先着10名様しか買えないからねー」

「あのな…凜。騙されてはイカン！それは企業の罠だ！」

限定品とか数量限定とかつければ売れると思ってボッタ価格で売るんだよなコレが！

ん？というか前提からしておかしいぞ？……なんで凜が――

「なんで凜がヌイグルミなんて欲しがるんだ？」

普通の女子ならまだしもと心の中で付け加えておく。

「えつとねー。神様が買えって啓示しているからかな？」

……どんな神様だよ！？

必死にヌイグルミを売り込む神様なんてシニールだぞ！どこかのサラリーマンじゃあるまいし！

んー、怪しい宗教に掛かってしまったとかか？

「なあ、凜。宗教勧誘とかどう思う？」

「死ねばいい——」

「ストロップ！！、そういう事言っちゃ駄目だから！！！」

「でも、翔が聞いてきたんだけどねー」

うつ……確かに確かにそうだけど！

人の宗教観に干渉するのは危険なんだよ！

「それにね、いきなりチャイムで呼び出したと思ったらね。

【さあ、この経典を読もう！とつとと読もう！読め罪人め！それがお前の幸せだ！】

とか騒ぎ出すんだよー、押し付け気味にやられたから殺意が沸いたよー」

………怖い。

なにが恐いかってその宗教は勿論だけど、凜に殺意を沸かせた事が何より恐い。

だが、一応俺は恐る恐る続きを促す……人生知らない方が良いことなんて山ほどあるのにな。

「で………凜はどうしたんだ？」

「んーとね、【僕が神だよー、従ってくれないかな？】と言いながら包丁突きつけちゃったー」

衝撃事実我が親友は神であつた……！！

「凜……お前神だったのか？」

「そうだよー、日本には八百万の神様がいるっていう位だからね。多分一人は僕だと思うよー」

ふむ、本気がジョークか分からん。

まあ、主題に戻ると凜は怪しい宗教にかかってなかったという事だな。

ところで凜は、神様が買えと啓示したとか言っていたよな？

つまり………凜Ⅱ神だとすると、ヌイグルミは凜が欲しかっただけになる筈だよな？

それについて凜に聞いてみたが、それは違うらしい………本当に神の啓示を受けたとかで。

そして結局、俺は金を貸さなかった。

というより………俺が貧乏人だということだ。主に凜のせいで。

次の日――

「翔、バイトして4800円貯めたよー。でも時給600円とかで儲からなかったから辞めちゃったー」

「時給600円？それは安すぎだな、法律上大丈夫か不安な程に。一体どこでバイトしたんだ？」

「パチンコ屋かな？」

…おいそれは大丈夫なのか？

「大丈夫だよー。お客側だからー」

それも駄目だって……ってそれバイトと違うし！
それにギャンブルをやる方が駄目なんじゃないか！？
しかも地味に儲けてるし！

次の日――

凜の机周辺に人が集まっていた。
それは、ある紙に名前を書いている生徒の列であった。

「凜、これはどういうことだ？」

「んー、お弁当の予約表かな？2000円で明日のお弁当作ってくれるよ？翔も買っ？」

「俺は…いいや」

2000円とか高すぎるしな！

だが、予約表には沢山の生徒の名前があった。

女子の手作り弁当とかって憧れるものなのか？

ついでにいうと委員長は10人前を予約していた。

次の日――

予約した大量のお弁当を配った後、凜は腕相撲大会を開いた。

黒板にデカデカと「僕を倒したら賞金1万円。参加費1000円」と書いてからだ。

所詮女子だと侮った男子や、そろそろ疲れてくるだろうと予想した男子が**バカ**いい餌食となっていた。

因みに心太は無謀にも3回も挑んだ……お金を溝に捨てるようなものであった。

次の日（1／1スケールのクマの。Iさんの発売日である）――

「翔一、とうとう5万円貯まったよー」

との声により、俺と凜は、学校の帰りに先着10名のプ。さんを買って帰った。

……良かったな凜。

第44主義「朝からド。クエ」

朝学校にて――

「よ、翔。今日は凜はどうしたんだYO?」

「ん?別に」

「沢尻工。カかYO!」

あー、意識していなかったが確かにな。
一時期流行ったよな【別に】って。

その時なんて、誰に何を言っても【別に】で返されたな。

「それで心太。凜がどうかしたのか?」

「いや、まだ学校にきてないからさ」

「ま、多分大丈夫であろう」

凜が遅刻する事は多分ないだろう。

下手に信号に引っ掛かってしまう車より速いだろうしな。

……オーバーか? いや化け物であるのだし順当な評価だろう。

「確かにNA! 凜は女の皮を被った鬼だしNA!」

「ふむ、良い例えだな。しかし凜に聞かれていたら抹殺される言葉だな」

「鬼っていうのは流石にまづかったKA！」

「いや、そちらでは無く。禁句の方である」

「あー、忘れてたぜ！」

馬鹿は死ななきゃ直らないらしい。

なんども気を失う程の目にあっておきながらコレではな。

「ところで翔！なんとなく思ったんだが翔が禁句を発しても大丈夫なこと多いよNA！」

……どこをどうしたらこの馬鹿はそう判断するのであろう。

野口様が2名殉職した事件は、まだ割りと最近ではないだろうか？

「心太の失言が多いため、俺と比べるとそう感じるのではないか？」

そういうと心太は、うーんと考え始めた。

その内に我がクラスに疾風が通った。

クラスの扉がガシャンとプチ開けられ、ビュウツと風を切りある場所にて留まった。

ある場所とは俺等の前なのだが……。

「おはようー。翔とシンシン」

疾風つまり凜が俺等に挨拶を交わす。

なんとなく壁掛け時計を見ると遅刻まで3秒前であった。

続いて、我がクラスにもう一人入ってきた。

担任の藤森である。

「よし、席付けー」

クラス中に散っていた生徒達が適所についた所で藤森は言葉を続ける。

「えっとな、今日は何か特別な予定とかあったか？」

担任が聞いてどうする……！！

「おっと、思い出した。今日は期末テスト返すぞ」

その一声にて、クラスに無音空間が発生した。

それから、クラス全体からどっと叫びが挙がりだした。

「神は死んだ……！！」

「テスト？何ソレ？食べれるの？」

「ワタシニホンゴワカリマセーン……！！」

「ザラキ、ザラキ、ザラキ、Z A R A K I……！！」

心太お前は何をいつている……！？

「ザオリク、ザオリク、ザオリク、ザオリクー」

凜！変に乗るな……！！

結果、我がクラスには「デイン、デイン」や「ヒヤド、ヒヤド」や「メラ、ムラムラ」などの朝っぱらから妙な呪文が行き交った。クラスメートのノリの良さには驚いた。

だが、その妙な呪文協奏曲も藤森の一声にて止められた。

「マホトーン、マホトーン、マホトーン」

担任までノリが良いものだ。

しかも「マホトーン」の一声にて黙らせるとは藤森は意外と頭が回るな！

「いてつく波——」

最後に余計な言葉で「マホトーン」を打ち消そうとした凜の口を塞いでおく。

それを始めるとエンドレスになるからな！

第44主義「朝からド。クエ」(後書き)

駄作者です。更新すみません> <。

それと駄作者の駄作が一作増えました 脱力Rally です。
ぜつしんよりは部活要素が強くなる予定です、更新は…… (汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1427f/>

絶対、親友(?)主義

2010年10月10日06時01分発行